

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

蛤 姫 (下)

佐藤家の昔話(八)

編 武 田 正

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

蛤

姫
(下)

佐藤家の昔話(八)

編 武 田 正

蛤 姫 (下)

76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61

童子切りの名刀
楠正成
石肥三年
俵藤太
風吹くと桶屋がもうかる
三つすくみの丸すくみ
狐と狸の化けくらべ
縁切り
天狗の足駄
食わず女房
黄粉爺
おたたか鳥
猿躰入
瓜姫子
まま子いじめ
ねずみ浄土

36 33 29 26 24 22 20 17 15 13 12 11 9 7 6 4

92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77

貧乏の神
弘法の石芋
狐のお産
七草
日吉丸 | 和尚と小僧 |
大工のおかた
村正と正宗
犬の足
猿と蛙の寄合餅
火車猫
商人と蛇
鶯言葉
蚕と馬
烏ぼたもち
まま子ともぐら
石炭の由来

67 64 61 60 58 56 55 53 52 50 48 47 45 44 42 39

佐藤家の昔話 (八)

111 110 109 108 107 106 105 104 103 102 101 100 99 98 97 96 95 94 93

石油の由来
銅の山
寝太郎 — ぬるくす太郎 —
十二支由来
鱒女房
山鳥女房
七福神
六部と牡丹餅
桑原桑原
トクサのワラジ
鴨取りの大大たり
神ない話
恵比須講
カイモチ
中折帽の由来
沢庵漬の由来
田の草取り
団子の木の汁
田舎言葉

98 96 94 93 92 91 88 87 85 84 82 80 79 76 74 73 70 69 68

あとがき
127 126 125 124 123 122 121 120 119 118 117 116 115 114 113 112
桃栗三年柿八年
梅干
トツキ亀
昔語り
山刀切りと牛引ワラジ
胆だめし
苞コの納豆の賭
舐めくらべ
かちかち山
猿蟹合戦
花咲爺
桃太郎
舌切り雀
米福と栗福
浦島太郎
竹の爺

150 147 143 138 135 131 126 122 115 114 112 110 108 106 102 100 99

61 童子切りの名刀

370

むかしむかし、日本には三名刀で言わった童子切り、酒吞童子ば切った童子切りて言わった名刀の由来について。

むかしむかし、大江山さ酒吞童子ていう鬼がいて、民、百姓、いろいろ苦しめらった。はいつ退治に行ったは、一に頼光、二に渡辺、三に貞光、四に季武、五に宝生、六に金時ていうえらい侍共がこの手下をつれて、ほして大江山さ酒吞童子を退治に行った。ほしてまともな勝負では中々うまくないて言うて、山伏に化けて酒背負って酒吞ませて、そして夜、酒吞童子の寝っただどこさ行って、酒吞童子の首はねたわけだ。ところが頼光のカブトさ、いきなりかぶついた。それをまたはらって、ほして意気ようようと引上げてきた。一躍鬼の首切ったていうので童子切りていう刀が有名になったわけだ。

どうして渡ったのか、それが斎藤道三の手に渡って、ほれから織田信長、豊臣

秀吉、徳川家康と、こういう風に渡りに渡って、それから、杳として消息がわからなかった。たまたま日露戦争のときに、乃木大將が出征すつどき、乃木大將が当時中將であつたげんども、贈つた人がいた。て、その刀は何刀だかわからなくて、乃木大將がそれを頂戴して行つて、日露戦争が終つて、そして凱旋してきた。

あまりコツコウダイ、リョジュンの戦いで部下を殺したというので、死んでお詫びするていうたところが、明治大帝から、

「いや、お前の死はあずかりだ」

て、こういう風に言^やつて、ほしていだつたが、たまたま明治大帝も御薨去あらせられた。そのとき辞世の句を残して、

うつし世を神さりましし大君の

みやとしたいて我は行くなり

て、残して自刃して、静子夫人と共に果てたわけだ。その自刃した刀がやつぱり童子切りだったど。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、楠正成という、えらい大将いだっけど。ほして中々武勇にもすぐれていて、はかりごとにも上手だった。

たまたま、敵軍が優勢で、たびたび危険になることあった。その時は一方には藁人形を作つて、ほして少人数で大声を上げらせて、大軍が来たように見せかけて、うしろの方から廻ったりなんかして、さんざん賊軍をやつつけたわけだ。

ところがある時、賊軍の方が優勢で、孤立無援のような形になってしまった。

それはまずええとしても、食糧攻め、水攻めに遭つてしまった。食糧は何とかなつけども、水はとつてもとつても苦しかった。ほんどき一策を案じて、敵のよく見えるようなどこさ、馬ば引張り出して、その馬の背中さ水ぶっかけたように見せるようにして、米ぶっかけた。ざあざあ、ざあざあと、下の方から見たれば、ちようど水で馬洗つたように見えた。

「ははあ、なんぼ水汲むとこ封鎖したてわかんね、上にはどこかに水出つどこあ

んなだか知んね、馬洗うほど水出る」

というわけで、水攻め解いだったて。ほれから水ゆうゆうと使ういぐなつて、戦さ有利な方き導いだった。どんぴんからりん、すつからりん。

63 石 肥 三 年

372

むかしむかし、ある村に与平さんという人いだった。ほの人は、朝から晩まで「ありがたい、ありがたい、ありがたい話だ」てばり言うてるもんだから、誰言うとなく「ありがた^う与平、ありがた^う与平」て言うようになった。

ほして、決して怒らねがったもんだから、我鬼べらまで舐めていたずらして、馬糞^{まんそ}ぶつつけたり、ほら何かえした。ほんでもごしやがね。「ありがたい、ありがたい」て言うていかなかった。ほして、ほの馬糞、畑^{こやし}さ肥料して、作物うんとええあんばい採って、ほして喜んでいだった。

ある時、田んぼさ行つて見たれば、田ん中石だらけだった。ちよえつと見たれば狐子だいつぱい逃げて行つた。

「ははあ、狐子だいたずらしたんだな、よし」

ていうわけで、大声上げて、与平さんが言うた。

「いやいや、ありがたいもんだ、ありがたいもんだ。石も三年経つと小便たれるて言うたもんだ。こだえいつぱいの石あ小便たつでけだら、田、たいしたごど、ええあんばいだ。かいつ、もし馬糞だったり、何かえモクダだったりしたら、おえねえごと（困ったこと）始まつかった」

はいつ聞いっただ狐子だ、むんつんなもんだから、みな石片付けて、次の日、すぱっと馬糞だらけにしたけど。んだから、何事も短気おこさねで、感謝の氣持もつてゐる人は、いつか、ええごとあるもんだとて、昔の人あ言うたもんだと。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、百足のすばらしい大きな出て、ほして畑は荒らす、人さは害加える何とも仕様ない。

「誰か、ほの百足退治する者いねが」

何人も、侍、百姓、いろいろな者退治に行ったげんども、ほら、みなほの百足にやらつでしまつて、帰つて来た者ざあいね。困つたもんだ、誰か退治する者いねがて言うたれば、藤原藤太秀郷という人あ、

「んでは、おれが退治する」

ほういうわけで、ほして山にある毒草のトリカブトというのと、サンショ、それをグダグダ、グダグダ煮つめて、弓の矢の先さつけて、ほして行つた。ほうしたれば、目の玉光るんだけど。いやまぶしいようになった。よくよく傍まで近づけてから、その毒矢を、ひようと射つたわけだ。ほうしたればええあんばい頭さ当つて、ほしてたちまち火が消えてしまつて、ほして七日七夜苦しんだ。とうと

う死んでしまった。ほしてはいつの御褒美に、俵米もらった。ほしてその俵さ入った米、

「かいつ、決して底叩くなよ、底叩かねど、いつまでも米がいつまでも出る俵だ」
　　こういうわけで、家さ来てあけだ。ほうしたら、なんぼしても無くならね、決して底叩ぐなて言^やっだから底叩かねでいたれば、同じに米ぞろぞろ、ぞろぞろ出てくる。ほれから誰言^やうとなく藤原藤太秀郷で言^やねで、俵藤太秀郷で言^やうた。今でも昭和三十年頃までは俵使った。んで俵の底ざあ決して叩くなよ、て、昔から叩かねもんだ。はいつあ俵藤太の時からのことだど。どんぴんからりん、すっからりん。

65 風吹くと桶屋がもうかる

374

むかしは風吹くど、タガ屋がもうかると言うたもんだど。はいつあどういうわけだかて言うど、春先風吹くと、バン埃立つて、目さ入る、目さ入つど眼病が出る。目病が出つどそのうち何人かが盲目になった。盲目になつど、そのうち男ばりでない、女もいたもんだから、瞽女さまになった。おナカマ（巫女）になった。おナカマざあ唯歩くわけなくて、三味線持^たつて歩く。んだど、こんど三味線がいつぱい要るもんだから、猫あ片つ端から殺さつた、猫殺されつどこんどはネズミあふえて困つた。んでネズミがふえて、コガかじつたり、桶かじつたり、手桶かじつたりすつかった。んだもんだから、桶屋がもうがった。こういうわけだけど、どんぴんからりん、すつからりん。

むかし、三すくみ三つの九すくみていうなあった。はいつあどういうことだから、
と言うど、旦那に対しては狐が上だ。旦那を化かすから。

狐ば狩人が射^ふつから狩人の方が上だ。

狩人は旦那さ頭上がんねから、旦那の方、上だ。

というて、ほの三つ、みな偉いざあなくて、一つずつ弱点もってで負ける。こ
ういうことだ。

ほれから、蛇は蛙ば呑むから、蛙よりあらい。んだげんど、ナメクジさ弱い。
ナメクジは蛇に対してはきわめてあらい。蛇はナメクジにとけるなんて言うた。
ところが蛙にはナメクジ一呑みにされる。これも三つ、ぐるりぐるり廻る。

それから、グー、チョキ、パアのジャンケンポン。

これはカミはハサミに切られる。ハサミはイシに齒立たね、ほしてカミにイシ
は包かれつから負ける。こういう風に「三つのすくみの、九すくみ」て、先^{せん}にの

人は言うたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

67 狐と狸の化けくらべ

376

むかしむかし、野っ原で狐と狸が行き会った。ほして、いろいろ四方山話して
いるうちに、とうとう自慢話になって、化けくらべになった。

「おれはお前より上手に化ける」

「いや、おれあ上手に化ける」

ほして、「んだら、何時いつの何日いつどこか二人あ会って、ほしてこれがお前だって分
からったら、分わからっただ人負け、こんでどうだ」

「ええがんべ」

というわけで、「ほんでは、何刻、何刻、ええか」というわけで、二人が別った。

丁度お月さま、十五夜こうこうと出る晩、狐は花嫁に化けて行いった。ほうしてシャ

ナリ、シャナリ通る人でもない道をずうつと行つた。なんだかなんぼ行つても行つても、待つてでも狸あ化けて来て、ここらでちよつと一休みでもすつかなあと思つてだれば、プンプンと何だか油揚げの匂いして来た。

「ほう、誰か油揚げでも落して行つたかな」

と思つて、その油揚げ拾つて食うべと思つたら、「いたた……」と。

はいつは、狸が化げだんだつたど。

「どうだ、おれに負けたべ」

「いや、これはしてやられた」

ていうわけで、その場は狐あ狸に負けた。

「んだらば、おれ、何時いつの何日いつか、ここの街道、殿さまに化けて通つから、ほんどきどれが、おれが化けたんだか見やらかしたら、お前の勝、見めけらんねがったらおれの勝だ、どうだ」

「ええがんべ」

ていうわけで、ほだえしているうち、「下に、下に」ていうわけで、殿さま通つ

た。いきなり飛び出して、殿さまに化けだべと思つて、殿さまどこさ行ったら、いきなり役人に脇腹蹴らつた。いや痛いことつたて、キャンキャンていうて逃げてきた。ほうしたら、狐あ出てきて、

「あいっあ、おれ化けだなくて、本物だった。本物見破らんねだけ、おれより神通力ないなだ、化け方下手なだ」

て、二人はあいこだっけど。どんぴんからりん、すっからりん。

68 縁 切 り

377

むかしむかし、昔はこの村でも人逝くなつたりすつど、土葬と火葬どあつて、その火葬場ていうな、村毎にあつた。ところがある人が町ちや用達しに行つて、十時頃帰つてきてみれば、その火葬場の燃え残りの火のどこで、びらびら、ぴらぴらて、女の人いた。ほっちゃ行ったり、こっちゃ行ったり、ちらちらこ

ら歩く。

「はて、幽霊ざあ、かいつのごんだべかなあ」

て思ったげんども、ほの人は胆の坐った人なもんだから、ほこさそおつと行つて、して、その幽霊みたいな人ば押えでみた。ほうしたれば、

「やあ、許してけらっしゃい、許してけらっしゃい」

て、ほの人言うたつたて。

「なんだお前、今頃こだんどこいて」

て言うたれば、

「実はおれは、亭主ば嫌いで嫌いでなんねくて、別れっだいげんど、なぜすつど別れられんべて聞いだれば、火葬の火の灰とオハグロと練って齒さつけつど、縁切りになるど。んだから縁切れるように、こうしつたんだ」

て言うて、幽霊でもないくて、縁切りのためだつけど。どんぴんからりん、すつからりん。

69 天狗の足駄

378

むかしむかし、貧乏暮ししたおかちゃんと若者いだっけど。

ところがある時、寄る年波で、おかちゃんが病氣した。ほの病氣したのば扱わんなねもんだから、収入というな、ぱったり戸絶えてしまった。ほして薬買うこともさんねぐなった。ほんではというわけで、叔父さんの家さ薬買う錢借りに行った。したれば、

「今回だけ貸してやつけんども、すぐ返せな」

て言わった。

「はい」

て言うて買ってきて、はいつで全部薬買ってきて飲ませだげんど、まだ治らぬ。

困ったこと始まったと思つて、また何とも仕様ないから借り行つたらば、こんどあ貸して呉^けねがったはあて。帰つて来たれば、何だかお坊さんみたいな人と行き会つた。したらば、

「お前、金なくて困っているんねが」

「ほだ」

「んだらば、おれがええもの呉^けつけど、はいつ貰^うか」

「ええものていうな、どういふものだべ」

て聞いたれば、

「一本歯の足駄だ、この一本歯の足駄はいて転ぶたんび、小判が出る。んだげんども転ぶたんび背低くなる」

「転んで背低くなつたてええ、半分になつたてええから、おかちゃんの病氣だけは治して呉^けんなね。はいつお坊さま、おれさ譲^つてけらんねべか」
て言うたつて。

「よし、お前、背小つちやくくなつてもええごんだらば、んでは、こいつお前さ呉^つから一ぺん転んでみろ」

ほしてほの一本歯の足駄履いて転んだればチャリンて言うけあ、小判出はつてきた。

「ああ、小判」

小判で言えば、昔は大した錢だった。五両で首とぶていう時代だから。一両が出た。はいつで叔父つあんの借金なして、いっぱい薬買ってきた。ところがその足駄のことを、叔父つあんが聞きつけた。ほして若者からむりむり、もって行つて、自分が転んでみれば面白いほど出る。んで、錢出ることしか考えねがった。背小っちゃこくなることなど聞かねで、もって行つた。んだから、出んな面白くて、転んで転んで、転んでいるうちにはあ、米虫の虚空蔵虫ぐらい小っちゃぐなつて、錢は山ほどになっていだっけはあて。ほしてまた錢なくなつたからはあ、ほの若者は、叔父つあんさ行つて、ほの足駄借つできて錢出さんなねと思つたればあ、一人暮しの叔父つあんがはあ、虚空蔵虫みたい小っちゃこくなつてはあ、錢だらけ、庭中なつていだっけて。ほしてほの錢みなもつて、ほの若者が、おかちゃんさいっぱい薬だ、ほら栄養のあるもの食せたり何かえして、治して、薬に暮したけど。どんぴんからりん、すっからりん。

70 食わず女房

379

20

あるどこに欲のふかい若者いで、ほの若者は、

「いや、おれあおかた貰うときは、うんと稼いで、御飯なのあんまり食ねな嫁だとええげんど、御飯なのバクバク食れ^かつど……」

なて、食せんもいたましいがった。んだからどっからの嫁など来ねくて、相当晩婚になつていだつたはあ。年も取つてだつた。

ところが山の方から、きれいな娘来て、ほして、「こんばんは、こんばんは」て来た。見たればすばらしいきれいな娘だ。

「おれば、あの、何とか嫁にしてもらわんねべか、おれは、あの、御飯なの食^かんたてええなだ」

「ほう、ほんでは、おら家の家さうつてつけど」

て、ほの娘ばもらつた。ところが次の日から稼ぐは稼ぐは、洗濯は上手、ほら針は上手、掃除は上手、御飯炊きは上手、せっせっせと働く。ほして御飯なの、

いつ食くったざあない。御飯食ね嫁だ。

「へえ、ええ妻かか貰かったもんだ」

と思つたれば、友だちあ、

「お前のかか、ええ勘定でいたか」

「いやあ、おらえのかかみたい、御飯食ねで稼かせぐ」

「ほでないぞ、夜中に、お前、裏板さ上がって見てろ」

ほして、寝つだふりして、そおと夜中に裏板さ上がって行つて、裏板の節孔から見つたれば、夜中起きて、ほの女、御飯炊き始めた。何すんべと思つたらば、ヤキメシ大きい鉢さ一山にぎつた。米だら五升もあるほど。ほしたけあ、何すつど思つたら、髪ふり乱したけあ、髪ふり乱して口、耳まで割つて、ほのヤキメシ一つがらみ、すつぽんすつぽんと口の中さ投げて、たちまち鉢一つのヤキメシ食つてしまった。あららら、たまげたもんだと思つて、ほして、

「いやいや、おれあやつぱり間違つていだんだつた。金で稼かせぐなだの、何だので、ほだな人ざあ世の中にいねなだ、こりややつぱり妖怪変化だつた。おれあ心得ち

がいてだ」

て、ほん時から、ほの男は改心して、ええ若者になったけど。どんびんからりん、すっからりん。

71 黄 粉 爺

380

むかしむかし、あるところにじんつあとばんちやいだった。ほして二人とも黄粉好きまで、ほして牡丹餅さも黄粉、ほら餅も安部川にして食う。あるいは御飯さもかけて食う、二人とも黄粉好きだった。

あるとき、

「じんつあ、じんつあ、黄粉挽いでしろ」

て、頼まった。ほんではというわけで挽き臼で一生懸命挽いで、種子コ残ったな、

「明日、こいつ白で叩くべはあなあ」
あした はた

ていうわけでいだった。ところが挽いた黄粉、土間さ置くどネズミに食われる。下げるにや、ほだえいっぱいの黄粉下げっこない。なぜしたらええべて、

「ははあ、抱いて寝るに限る」

て、じんつあ、はいつば夜中に寢床さ入っでうしろの方さ置いっだ。どういっわけだかほのじんつあ、夜中に相当お尻鳴らす方の癖あつた。ほして起きてみたらば、みな黄粉はそつちや吹つとび、こつちや吹つとび、相当減つてだ。ばんちやへ、

「なんだまず、じんつあ、黄粉、尻けつさ置いてなんて、自分が屁たれんな知しやねわけであんまいし」

なて、ばんちやにごしやがつた。ほしたれば、何だかごそごそ、ごそごそなて音すつから、はいつ見たれば、キジだつて。ほれ、じんつあ屁たつで、黄粉の粉吹つとばしたもんだから、ほの匂いかいで、キジは煙出しから入ってきた。豆食だくて。ほしてキジせめて二人して、キジ汁して食つた。

「じんつあ、やっぱり、また黄粉挽いだら尻の方さ置がつて呉ろはあ」
て言うたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

72 おたたか鳥

むかしむかし、兄んつあと舎弟いで、兄んつあ道楽者で稼がねがった。舎弟の方は一生懸命稼ん^{かせ}かった。んだげんど、昔は長子相続ていうて、一番大きい兄は馬鹿でもデクでも家の後とりだった。

ほして、よっぱど大きい家でないど、分家なてしてけらね。ほんで舎弟いうな、聲か何かえ行ったり、あるいは東京（江戸）さ出はって行ったりすんなねがったわけだど。

んで、ある日、兄んつあ、家にばりいっけんども舎弟の方は山さ行つて、山芋掘つてきた。ほして、掘つてきても料理しねもんだから、舎弟の方は料理して、

兄んつあさうまいどこばっかり食せた。ところが兄は、

「おれささえも、こだえうまいどこ食せる、あの野郎、まだまだうまいところ食ったか」

と思つて、殺して胃袋さいでみたれば、アンコ、上の方の細いどこ、はいつなの、皮なのばり食つてだけつて。

「いやあ、悪れごとした」

ていうわけで、とうとう鳥になつてしまった。ほして八千八度鳴かねど、餌さありつかんねがつたど。はいつ気の毒に思つたモズがトカゲなの、あるいは赤蛙青蛙、そういう毛虫なのかえば、木の枝さ引っかけで呉んなだけど。そいつがミイラみたいになつて、ちよこちよこ目に付くなだけど。どんぴんからりん、すつからりん。

73 猿 聾 入

382

26

むかしむかし、日でり続いて日でり続いて、田さ水かからなくて、ある部落でも千刈田さポタツとも水かからなくて困つていたじんつあいだった。

ところがそこさ山から猿降りてきて、

「じんつあ、じんつあ、水欲しいか」

「いやあ、水欲しいげんど」

「んだらば、お前に娘三人いたずだ、どれか一人、おれさ呉^けつど、おれ水かけて呉^ける」

田、みな亀の子の背中みたいに割^わつさけで一粒も穫^とんねごんだら、家内中みな死ぬにはましたと思つて、

「上げあんす」

ていうた。ほして家さ来たげんども、じんつあ御飯食ねので、

「なしておまま食ね」

ていうたら、

「こうこう、こういうわけで、猿と約束して来た。一番大きい姉ちゃん、お前行つて呉^けつか」

て言うたれば、

「おれあ、ここの後とりだから、やんだ」

二番目の姉ちゃんも、

「姉ちゃん嫌んだどこなの、おれも嫌んだ」

て言うて、

「ほんでは、おれ行ぐつだな」

て、三番目の娘が行ぐようになった。ほして猿さ嫁入りした。丁度三月の節句のとき、里帰りとなった。ほして里帰りだから、

「里帰りていうな、人間の社会では餅搗いて、餅背負って行くんだ」

て、嫁が数えた。んだかて言うわけで、猿あ一生懸命餅搗いた。

「ほんでは重箱さ入って持って行んか」

て言うたれば、

「いや、おら家のおつつあんつあ、重箱の漆の匂い大嫌いだ」

「ほんでは鍋さ」

「いや、鍋は鉄くさくて駄目だ」

「ほんでは、何……」

「臼がらみ背負ってけらっしゃい」

て、猿は臼がらみ背負った。ほうしてずうつと来たれば、川あつて橋渡つて、ほのガケふちさ、すばらしいきれいな桜咲いっだった。

「あの桜、土産にもって行きたいげんど、とつて呉らんねべか」
て言うたら、

「ああ、あだな、採つて呉る」

ていうわけで、「んでは、臼、こき置いて」て言うたれば、娘は、

「いや、臼、土き置くど土くさくなつから、背負ったまま登つてけらっしゃい」
て言つて、猿あ、「こころんな、もんか」て言うたら、

「ほこら、下でわかんね。シンポ、いちばん、きれいだ」

というわけで、シンポエまで登って行くうちにはあ、ほのガケからドブンと川さ落つで、白軽こいもんだし、白さ結ゆつかったまんま、川流つで行ってしまった。ほして無事に家さ来たけど。んだから賢かしこい者にはかなわねけど。どんぴんからりん、すっからりん。

74 瓜 姫 子

383

むかしむかし、じんつあとばんちやいだっけど。

ほして、ある時、ばんちや町さ行ったらば、熟み瓜うりていいうな売っていだっけど。
ほして、

「はいつ、家さ蒔まいで、おらだも食うべなあ」
と思つて、

「じんつあ、じんつあ、町ちや行つたれば、すばらしい瓜出っただけがら、ほの瓜の種子、おら家でも蒔いてみんべな」

「何ていう瓜^{なえ}だけ、ばんちや」て言うたれば、

「マクラ瓜ていうたな」

「マクラ瓜ざああんまいな、マクワ瓜て言うんだべ」

「んだて、枕ぐらいあつけも」

「いや、はいつはどうでもええげんども、はいつは甘ごくて、うまいなで、はいつ蒔いてみんべ」

ていうわけで、次の年、その熟み瓜蒔いだんだど。したれば他なよりも、ひときわ大きい瓜あつけ。ほして光沢もええし、

「いやあ、じんつあ、じんつあ、すばらしい瓜なつた、まず割つて食うべ」
と思つたれば、中からきれいなめんごい、女おぼこ出はつてきた。

「かいつは神さまの、お授けだ。育てんべ」
ていうわけで、

「名前、何とつける」

「瓜から出はったから、〈瓜姫子〉とつけんべ」

て、瓜姫子と名付けた。ほして、蝶よ花よと育ててる。瓜姫子もだんだえ大きくなつて、ほして、いつとなくばんちやに聞いて機織りするようになった。ほして、キッコパタン、キッコパタン、トンカラリン、トンカラリンで機織つてだ。ほして、

「機も織つてけっし、瓜姫子の好きなトコロでも掘つて来て、食^かせんねっだな」
ていうわけで、山さ、じんつあとばんちや、トコロ掘り行ぐ。んだげんど、

「瓜姫子、ここに天邪鬼というて、悪れ奴いで、はいつ来つどなんねえから、決して戸開けんよ」

て言うて、山さトコロ掘りに行つた。ところが間もなく、「瓜姫子、瓜姫子」て来て、友だちなふりして遊びに来た。んでも開けんて言^やつだんだから、

「駄目だ、あけらんね」

「つうと、ええがんべな、つうと開けでけろ。小指入るほどでええから開けてけ

ろ」

気のええ瓜姫子は、ほれ、頼まっだもんだから、つうと開けてけだ。したれば、

「いまつうと、親指入るほど開けてける」

て言うもんだから、いまつうと開けてけだれば、グイラリと開けてはあ、中さ入って来て、瓜姫子ば天邪鬼は殺して、食ってしまったんだはあ。ほして表の柿の木さぶら下げて、自分が瓜姫子に化けて、機師さ上がて、機織の真似したんだ。ドガラエン、ドガラエンなて。

ほして、ほだごと知しゃねで、山からじんつあとばんちや来て、

「ほらほら、まず洗って、トコロ煮てけっから」

なて、煮て食せだれば、瓜姫子はほりや中しか食ねな、毛も皮もむちやむちやみな食う。「おかしいもんだ」と思つたれば、表でカラスあ鳴いだ。

瓜姫子は 柿の木

天邪鬼は 機師の上

て、鳥はないだ。おかしいこともあるもんだと思つて、ねつく見だれば、瓜姫

子だと思ったら、ほの天邪鬼あのつていだんだけど。じんつあとばんちゃ、ごしやえでほの天邪鬼ば殺して、畑と野原さ埋めだんだど。天邪鬼ば殺したときの血あ真赤になったもんだから畠のそばの根っこは赤いし、野原のカヤの根っこが赤いのは、天邪鬼の血のおかげだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

75 まま子いじめ

384

むかしむかし、あるところに夫婦者いで、ほしておかちゃんが一人の女子おなご産してはあ、間もなく死んでしまはあ。

ほして、おっつあんが若いもんだから、後かかもらった。後かかさも今度あ子ども生まつた。ところが後かか、先腹せんばらの子どもめんごくなくて、めんごくなくて仕様ない。なぜかしていびり出しだいげんども、世間態もあるもんだから、ほれもさんね。

ところが、だんだえ、先腹の子どもが顔青白くなって病人みたいになって行く。

おやじも不思議だなあと思ってたげんども、なしてなるんだかなあて思ってたげんども、まさかどういふことあつかていふことは解らねがった。ところがほの娘が寝でつど、夜、鬼かかり来る。ほうして冷たい舌でべたべたて舐める。だんだえ、だんだえ、がおつて行く。ほして最後に、鬼が言うて行く。

「ええが、このことは決して他言無用だ。人さ言うてなんねえ。人さ言うどお前たちまち死ぬぞ」

ほういふ風に言^やつた。んだげんどあんまりがおつて行くもんだから、おつつあんなが心配して、娘さ、

「なしてお前、ほだえ体でも悪れが」

て言うたれば、最初黙つていだげんど、ほの娘は、どうせ死ぬんだらと思つて、おれさばりでなく、ほの妹ださも来るでないかという氣あつたもんだから、一部始終語つたど。

「夜、赤い角生えつた鬼来て、おれば舐めるんだ」て。ほして、

「んだら、ええ。おれ今夜、お前ど床代わって、お前寝っこさおれ寝っから」
て。はいつつ知しやねで鬼あまた、こそりこそりと来て、赤い角生やして、ほしてコンニャクの舌で舐めはだたわけだ。「こりゃ！」て言うけあ、おやじにいきなり押えらった。

「何すんだ」

ほして一部始終わかったんだけど。ほの鬼の角に見せだのは、人參で鬼の面かぶって、舌はコンニャクだけど。ほうしてコンニャクの冷たいので恐怖感抱かせて殺す勘定だった。はいつがばれて、継母がおつつあんにおさえらったで、

「今度から、こういうことしねが」

「いやいや、おれ悪れがった、おれの心得ちがいだ」

て、うんと反省して、ほして当り前のおかちゃんになったけど。どんぴんからりん、すっからりん。

76 ねずみ浄土

385

36

むかしむかし、あるどこにじんつあとばんちやいで、ほしていろいろ、豆だ米だて、つうとこぼったり、余ったりすつど、

「ああ、ねずみちや食せろはあ」

ていうわけで、あんまり細くしねで、孔からちよろちよろ、ちよろちよろと節孔から落としてやったり、庭さ掃き捨てたりしておいた。はいつ、おこぼれ頂戴して、ほれ、ねずみだ、ええあんばい暮していた。ねずみだも折々、

「ほだえ、おらだ、こりや、じんつあにお世話になつて、いつか恩返さんなね」
て思っていた。ほしてある時、ねずみはじんつあ来て、

「じんつあ、じんつあ、おらだ心ばかりのことしたいから、おらえの家さ、行じやてけらっしゃい」

て言うた。

「んだて、お前の家、孔ちっちゃいべし、あれだべな」

「いや、さすがえない。ちえつと目つぶつてけらっしゃい」
まなぐ

じんつあ、ちよえつと目つぶつたれば、じんつあの頭の上さ、尻尾ちよえつとのせたけあ、何か呪文となえて、〈はい、目あいでけらっしゃい〉て言うたれば、すばらしい広いお座敷なんだけど。ほこさ行つて、ほれ、うまいもの御馳走になつて、ほうしてお酒御馳走になつて、

「いやいや、満腹だ、たくさんだ」て。「家さ行ぐだいがらはあ、さいならだ」て言うたらば、「んでは、ちよえつと待つてけらっしゃい」ていうわけで、大判小判いっぱい背負わせて、「んでは、じんつあん、目つぶつてでけらっしゃい」て、目つぶつたれば、頭の上さ尻尾ちよえつと上げて、何かムニヤムニヤて言うたけあ、「はい」て言うたれば元の自分の座敷さちやんと来て、ほして大判小判いっぱい背負せらつてきた。はいつ聞いた隣のじんつあ、「おれも」ていうわけで、ねずみさ頼んだ。ほしたら、ねずみは、ほれ「ええつだな」ていうわけで、隣のじんつあばも、尻尾頭の上さあげて、その部屋さ連せて行つた。ほしてさんさんばら御馳走になつて、ほうしたれば、

「うん、おれは帰ってから、土産もの用意しろ」

て言うた。ほうしたれば、すばらしくいっぱいのお金もって来たつて。ほいつ皆欲しくなったんだ。隣のじんつあ欲ふかだから。

「はあ、こんではうまくないから、どれ一つ、猫の真似でもしてけんべ、ニャオー」

たれば、「猫来た！」ていうたけあ、みなねずみあ逃げだんだ。ほうしたれば真暗ぐなつてはあ、部屋どこでなく、何だか「ゾゾー、ゾゾー」て、ほつつから土落つて来るような、こつちからも土崩つて来るような氣して、じんつあ、こんどは一生懸命、手でほじぐつて、隣のじんつあ、ほれ、逃げんなねわけだ。真暗だべし、どっちどう掘ったのかわかんねげんど、あっち掘りこつち掘り、ほうしてずうつと掘つて来て、ほうして固だいのあつけど。固っだいなんだべ、ここ掘らねど出はらんねど、こらて、ガツガツ、ガツガツ手でして、やつと、ほこ固いなば、やつとのし上げだれば、ひよこつと出はつて、はいつ自分の家の庭の藁打ち石の下だった。ほうしてほっからやつと命からがら出はつた。ほうした

れば、指の爪みな抜けてないがったどはあ。んだからあんまり欲深いこと
すつど爪抜けんぞて、昔の人は、ほういうどつから言うただけど。どんぴんか
らりん、すつからりん。

77 貧乏の神

386

むかしむかし、ある村にとつても働きの若衆いだんだっけど。なんぼ稼いで
も稼いでも金持ちになんね、おかしいもんだと思つて、ほして常にかげになり、
日向になりついでいるような者いつから、

「おい、お前、いったい何だ」て聞いたたら、

「おれは貧乏の神だ」

て、ほの影法師みたいな言うたつて。

「はあ、お前ふついでいつから、おれは金持ちにならんね、おれから離んねが」

て言うたらば、ほの貧乏の神は、

「いや、お前はええ人だから、お前からは離れらんね、おれはとてもお前から離れる氣しね」

ていうたつて。

「困ったもんだ、ほんではここにいては分んねから、東京（江戸）さ行つてはあ、辛抱して暮すからはあ、お前ここに居ろはあ」

て言うたら、

「いや、おれも江戸さ追かけて行く」
て言うた。

「お前に追かけらつて、どこさ行つても同じだべし、困ったもんだ。んだげんど江戸は広いどこだて聞いっだし、いろいろな商売もあるて聞いっだもんだから、ここにましたべ（ここよりよいだろう）」

と思つて、

「よし、ほんではおれは江戸さ行く」

ていう決心つけて出かけた。三間後ぐらいから、貧乏の神はとことこ追かけて行った。

「やめろ、追かげんな」

て、なんぼうしろふり返つてもわかんね。ところがあるどころさ行つたれば、大きい川あつて、ほして水増しでもあつたがして、橋みな流つて向う岸さ渡らね。「はあ、困つたもんだ」

ほしたれば、貧乏の神は、

「ちよつと待つてでけろ、誰か背負つてあつちや行がねげばざあ行がんねっだ。

まずじゃんけんすんべ」

て、二人はじゃんけんしたれば、若者負けて、負けた人は負んぶこだったど。ほして貧乏の神は若者は背負つた。約束だから仕方ない。ほして困つたもんだ。

「浅瀬、浅瀬で行ぐど、貧乏の神も落ちね、どうせ思い切つて深いどこさ行つてけましよう」

て、深いどこめがけて漕いで行つたれば、貧乏の神は、いきなり離つて、

「いや、駄目だ、駄目だ、おれは川一番にが手だ」

て、ほっから貧乏の神は離つてしまつたど。ほうして江戸さ行つて、次の日からええごどずくめで、とんとん拍子でもうかつた、もうかつたて、夜明すことばりあるほどもうかつたど。んだから貧乏の神ついであるうちは、なんぼ一生懸命なつたつてわかんねもんだて、昔の人は言うたもんだ。どんぴんからりん、すっからりん。

78 弘法の石芋

387

むかしむかし、弘法さまていう、えらい和尚さま、ずうつと行つたれば、田の中に芋ほりしつたおかちゃんいだつけて。

「もしもし、芋、おれさ呉^けでけらんねが」

弘法さん言うたれば、

「いや、この芋は食んねえ芋だ。石芋だから、わかんね」

て、そっけもなくことわってしまった。ほしてほだえしているうちに、次の年から、実った芋、ガツガツして、石と同じではあ、本当の石芋になって食んねがった。

したれば誰言うことなく、みんなあそこで、芋ごいした人は、あれは弘法さまだつたという、そういう話なて、ほのおかちゃん、

「いや、悪れごとした、ほんではおれ悪れなだった」

て、ほして高野山さ、こんど本当の芋たがってお詫びに行つたつて。ほれから田の中の石芋、元の里芋になつたけど。どんぴんからりん、すつからりん。

79 狐のお産

388

むかしむかし、昔は今みたい病院さ行ってお産するななくて、ほとんどみな産婆さんに来てもらってお産ていうなしたもんだど。

ある時、すばらしい上手な産婆さんなもんだから、隣の村から迎えに来た。て、行つて、ほして難産を何とかかんとか取り上げて呉た。ほうしたれば、何だか窮屈で、やつと入口入つて行つたような気がする。ほして銭いっぱいもらつてきて、村はずれまで来たれば、

「おれ、こつから送らんねがら、こつから一人ばり行つてけらっしゃいはあ」
「なして」て聞いだれば、

「大恐かない」て言うたつて。大恐かないなて不思議なもんだ。村さ行ぐと犬いっからなれつて、言うて、ほつから戻つて行つてしまった。おかしいこともあるもんだと思つて、家さ来て銭あけてみたれば、はいつあ木の葉だったど。

「はあ、ほんでは、おれ、狐にだまさつたんだ」

ほうしたれば、体中みな汚つていだつて。狐の穴の中さ入って行って、お産させてきた。んだげんど、その産婆さんが非常に喜んだつて。人間ばり、おれば名人だ何だていうんでなくて、狐までおれば頼けんで呉つかていうわけで、大変気分ええぐしたけど。どんぴんからりん、すつからりん。

80 七

草

389

むかし、正月、七草には七草がゆていうものしたもんだけど。

ある人が、なんだかみんな年取って行くのがどうしてだべて考えれば、夜、枕神立って、唐の国からと大和の国から鳥とんできて、ほして栄養のあるもの、みな食ってしまうがらだつて。んだから、はいつ食んねうち、こっちの方で食つてしまわんなねていうので、はいつあんだかて言うど、七草だ、春の七草、

せり、はこべ、ごぎょう、はこべら、ほとけのぎ、すずな、すずしろ

こいつばみな唐土の鳥と大和の鳥、来ねうちはあ、叩いて食ってしまふ。んだ
ど年とらねて言うたもんだ。ほしてどこの家でも、六日の日に準備して、七日の
日、なんなん叩きていうのやったもんだ。

なんなん 七草

唐土の鳥と大和の鳥の

渡らぬうちに

なんなん 叩き

七たたき

て、こういう風になえて、スリコギ棒で七草ば叩いて、七草がゆて言うて、
おかゆにして食べだ。ほうすつど、栄養もよかったと見えて、先には、それを長
年の生活の智恵で、どこの家でも七草がゆていうな、七草たたきていうの、聞がっ
だもんだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、日吉丸という子どもいて、後の太閤関白秀吉になった人だげんども、小っちゃこいときはとつても頓智もあるし、きかねがった。あんまりきかねがったもんだから、お寺さ小僧こにやらった。

ところがある日、檀家から牡丹餅届いた。和尚さんが出かけた。何とも子どもなもんだから、食くだくて食くつてしまった。黙もくつて食くたな言うどごしやがれつから、お釈迦さまの口さ小豆あずきば塗ぬつて、ほして和尚さん帰かへつて来てから、それ見て、

「なんだ、こりや、日吉丸。お前、牡丹餅食かつたな」

「食かねっす」

「食ねなて、減へつたどこりや」

「何だか、あの、さっきお釈迦さま食たつたようだけ」

「お釈迦さま食たつたりしね」

「いや、口さ小豆あずきついったかも知んね」

自分がつけて、すました顔でそういう風に言うた。したれば、

「よし、食ったか食ねが、叩いてみつど、いっぺんでわかる」

和尚さんが、お釈迦さまば叩いてみたれば、クワンクワンて言うたど。

「ほれ、食ね、食ねて言うたどら」

したれば、日吉丸は大きな鍋さお湯グダグダ煮たど。はいっちやこんどはお釈迦さまば煮たど。ほしたれば、クタクタ、クタクタていうたつて。したれば和尚さんが、「いやいや、負けた負けた」ていうたど。どんぴんからりん、すっからりん。

82 大工のおかた

391

たてまえの飾りものの由来。

むかしむかし、すばらしい棟梁がいて、お観音さま建てだった。ところが弟子

が間違つて、ゴハイ柱短かく切ってしまった。

「こりや、困ったこと始まったもんだ、いよいよたてまえていうとき、柱短かく切ったなて言うていらんね、弟子のやったことは全て棟梁の責任だ。なぜしたらええがんべなあ」

て考えったらば、

「ほだな簡単だ、袴はかせて、袴の中き継げばええっだな。んだど見えねっだな。外から。ほだな五寸、三寸何とでもなるっだな」

て教えだ。おっかが。

「ああ、なるほど」

て、わかつて、たてまえに事なきを得たど。んだげんども、そいつがもれたりしたら困ったことになるというわけで、おかたば殺してしまった。んだげんども何だか氣持わるい。

ほんでおっかの喜ぶもの、クシ、カガミ、カンザシなていうものを全部飾つて憑らんねようにしたのが、たてまえの飾りものの始まりだけど。どんぴんからり

ん、すっからりん。

83 村正と正宗

392

むかしむかし、刀匠の村正と正宗というな居だった。どっちも「おれが日本一だ」て、ゆずらねがったど。

ほんで、正宗という人は、なんぼしても師匠が秘伝を許さね。湯加減、水加減許さね。何とか一つ、かいっ憶えて呉^けましようて、鍛えるふりして、そのお湯さちよえっと手突込んだ。突込むより早く、師匠にばっさり腕やらっで、へてんぼう正宗て、片手不自由だった。んだげんども、すでにぴーんと頭さ伝わって、湯加減、水加減がわかってしまつて、師匠の奥義を盗みとったわけだけど。ほして殿さまが、どっち上手だかというわけで、どっち切れっかというわけで、試し切りをやった。ところがやる方法として、大きい川さ春になつて水増しになつて来っ

ど、モグダよ木よ、ほら何よて、いろいろなもの流つてくる。そこき刀を立てて、そろりそろりと何でも切つて行つた方がええがんで、相談一決して、そうして春の水増しになったとき、川き正宗の名刀と村正の名刀を結わえつけた。

ところが村正の方は太い材木きても二つにソリ。ほらモグダもソリソリとみな切れる。

「いや、すばらしいもんだ、村正は切れる」

ところが正宗の方が、傍さ来つど、すいっとよけ、また太つとい材木、

「ありやりや、あいつぶつつかつて、切んねんであんまいし」

と思うど、すいっとよけで行き、すいっとよけて行きしたつたど。

したれば殿さま、始めて言うたど。

「世の中、切れるばり能でない。なんぼ刀だて、切らねておさまつたに越したことはない」

ていうわけで、正宗の名刀が日本一だていうことになったけど。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、犬が神さまさ仕えつた時代は、足が三本だったど。ほして一生懸命神さまさ仕えるもんだから、犬さ言うたつて。

「何か望みのものないか」て。ほしたら、

「神さま、神さま、世に望みないげんども、足三本では何とも安定がわるくて困ったもんだ。なぜかこいつ、世の動物みたい、四本にしてもらわんねが」

「いや、ほだなことは、あんまりええ」

ていうわけで、どっからか持つて来て、足一本、ちよえつとふつつけた。ほしてはじめて四本になった。ところが犬もなかなか堅いもんだから、オシッコすつどき、ほの神さまからもらつた足さひつかかつど失札に当るていうわけで、やつこらさつと上げて、オシッコした。今でも犬、オシッコすつどき、神さまからもらつた足さオシッコ掛つどなんねていうわけで、片足上げて小便たれんなだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、お猿さんと蛙と山で一緒になった。ほしていろいろ世間話語りながら行つたれば、ほこさ餅米三升ばかり落つていだけ。間もなく行つたれば臼落つていだけ。二人は餅搗いたところが、猿あ蛙さ食せん、いたましくなつた。

「蛙どの、蛙どの、かいつ山の上から沢まで転がして、臼転がして行つて、早く着いだ人食うこすんべね」

て言うた。いや蛙は、何とも仕様ないと思つて、さっぱり御馳走ならんねと思つていた。ほして臼の餅あ搗いて搗き上がったれば、猿、いきなり臼ば横にしたけあ、ごろごろ、ごろごろ転がし始めた。その早いごと。蛙はぺたりぺたりて、なんぼ本氣になつて追いかけてもわかんねがつた。ほして途中まで行つたれば、そつくり餅落つていだけ。

「ああ、ええがつたこりや」

ていうわけで、ほこで蛙あ餅拾ったんだ。ほうしたれば、どんどん、どんどん臼転がして行って、沢まで行ってみれば餅さっぱりないわけだ。

「いやいや、困った。途中さ落したこりや」

ていうわけで、臼の跡ついたどこ猿あ一生懸命もどつて来た。ほして来てみたら、ちゃんと蛙どのは拾っていだっけはあ。

「蛙どの、蛙どの、つうと（少し）おれさも呉ろ」

「なんだ、お前が、拾った人のものっていうことに約束したんだべな。お前から言つて、ほだな話さあないっだな」

「いや、何とか、何とか」

て願わつて、ほんではていうわけで、千切つてポーンてぶなげてやったらば、頬ほったぶさペターツとふつついた。

「あつい、あつい、あつい」

て言うて、それから猿のほったぶ赤くなつただけ。どんびんからりん、すっからりん。

むかしとんとんあつたずま。

猫ていうな、十三年以上おもうど化けるていうたもんだど。化けた猫のことを、
《火車猫》ていうた。

ほしてある時、火車猫がお観音さまお詣りに行つた。ところがお観音さまが、
「お前、むかさりもらいたいところあるんだが、むかさに化けられつか」

「いやいや、むかさりなの簡単だ」

「んでは、むかさに化けて、ずうつと化け通すとおいが、通すいごんだら、おれ、
仲人してあげる」

観音さま、こういう風に言うたど。したら、「ほだな簡単だ」「元の本性出さね
が」「出さねつす」て、「ほだらば、ええ」ていうわけで、約束して、ほしてお観
音さま仲人で、ほれ、花嫁衣装着て、むかさりになって行つた。ほしていいいよ
固めの盃、三々九度ていうとき、家の隅っこでねずみ、ちゅうちゅう、ちゅうちゅ

うて出はつてきた。ほうすつど我慢さんねくて、元の猫の姿になって、いきなり飛びかかった。ほして、やつぱり人間のおかたにならんねくて、ほして猫は猫だけど。火車猫になつてもやつぱり本性ていうの現わすもんだから、駄目だて、みんな言うたけど。どんぴんからりん、すつからりん。

87 商人と蛇

396

むかしむかし、商人がずうつと旅して行つたれば、秋・さ・かなもんだからはあ、霜柱の上に蛇がかたまつて、ソッキみたいになつて固くなつていだ。寒くて何とも仕様なくて、こごえるみたいしつた。

「いやいや、可哀そうだ」

と思つて、ふところさ入つてだ。したればだんだえ温あたかくなつて動き出してきた。ほしたけあ、ほの旅人の腹、喰付いてしまったんだど。喰付いた蛇、なんだ

と思つたら蝮なんだけど。ほうしてほの蝮の毒廻つて、して、旅人言うた。

「何だ、お前。おれにこれほどめんどろ見らつて、いま少しで凍え死んでしまうどこ、おれはフトコロさ温めで呉つたな、なして人の腹喰付くなだ」

したれば、蛇は言うたど。

「いや、おれは商売だから喰付いだごで、喰付くな商売だ。お前も商人商売と同じで、おれは喰付くな商売だ」

て言うて、何らほの反省の色もながつたど。んだから人間も、ほのぐらいめんどう見ても、かえつてあだする人いっから、氣付けんねもんだて、昔の人あ言うたもんだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、あるどこから檐下の宿さ嫁にきた。嫁に来つとき、

「檐下ざあ、宿場で、言葉のええどこだから、言葉の上さへお」をつけんなねぞ」
て教えらつてきた。で、あるとき、

「なして、こりや、ここ開けつた障子閉^たてだ」
て言^やつたれば、その嫁さま、

「お風がお吹きになつてきて、おかたんおかたんというもんだから、おとあしがおわれるなつかと思つて、おたてだ」

て、こういう風に言うたど。

「はあ」

ほだえしているうち、八百屋さんが来た。

「あつちから来たな、誰^{だん}だやあ」て聞いたれば、「おやおやさんだ」て言うたど。
「なんだ、おやおやさんなていう商売あつか」

これもわからねがった。ほして、

「お前の方のどこそこの嫁、大変ええ娘だていう話聞いた。なんだ娘だ」

て言^ゆつたれば、「にこにこてええ娘だ」て言うどこだったげんど、〈お〉つけたもんだから、

「おにこ、おにこ」て言うてしまったど。んだからええ娘が、〈鬼子〉になつてしまった。

また秋田からお嫁に來た人なの、タバコ買^いに行つて、「秋田は〈コ〉つけつど笑われつど、言葉の尻さ〈コ〉つけんなな」て言わつだもんだから、店さ、

「タバ、呉^けでけらしやい」て行つたらば、何の〈束〉だかわかんねくて、用向きわからねがった。んだから、付けつどこさは付けで、付けねどこさは付けらんねもんだて、先^{せん}にの人は言うたそ^うだ。どんぴんからりん、すつからりん。

むかし、唐の国の旦那衆さ、一匹の男馬が飼わっていたど。ところがほこに一人娘がいて、とつても間柄がええくて、二人が仲良かった。んだげんども、唐の国どて、馬と一緒になるわけ行かね。ほして恋こがれて、

「んだらば、おれ死んで、蚕にでもなつて、ほしてほいつの糸とつてもらつて、一生体さつけてもらつた方が、仕合せだべ」

て、ある時ほの馬死んでしまった。

ほうしたけあ、ほの毛一本一本が全部お蚕様ミになった。ほして、はいつさ一生懸命、ほの娘が桑食わせて育てた。ほうして大きくなつて見たれば、やっぱり背中さ馬の足跡二つついっただけで。

「ああ、やつぱりあの馬だったな」て。

「おれ、この蚕立派に育てて、そして機織つて、一生着んべはあ」
ていうて、一生懸命、蚕手入れして機織つて、ほして身さつけて暮したけど。

はいつが今のお蚕^こさまのはじまりだけど。どんびんからりん、すつからりん。

90 烏ぼたもち

399

むかしむかし、ある百姓の人が、町さ用達しに行くべと思つて、降つて行つたれば、餓鬼べら、鳥の子七匹ばり獲つて、足さ木綿糸結^ゆつけて飛ばしたり、なにかえしていじめっだけ。かわいそうでなんねから、

「お前だ、ほの鳥、おれさ売つて呉ねがはあ、かわいそうだ」

「うん、鳥なの、とっどなんぼも巢とつてくれっどあっから、売るっだな」

て、昔の金出して、ほこで鳥買ったわけだ。ほして、ほの鳥ば、元の巢の母親のところさ置いて来て、町さ用達しに行った。そして帰つてきた。ところが立札立っていだっけ。

「おら家の山の木、三日以内に勘定した者は娘髻にする」

こういう風な立札立ってだ。

「はあ、おらの息子、一つ、あれしたいげんども、山大尽て言っやたくらいすばらしい山持ちだ。ほこの聳どのになるなて、大したもんだ。んだげんど三日以内になげして、あだいいっぱいの山の本数えしたらええかわからね。困ったことはじまったなあ」

と、思つて、んだげんども何とかうまい工夫ないべかなあて、考えながら来たれば、鳥の親が降りてきて、

「旦那さま、旦那さま、何心配した」

「いや、こういうわけだ」て、鳥さ語つたれば、

「ほだな簡単だ、お前に助けてもらった子どもと、おれとかかと九匹して、全部数えつから、おれ、お前さ教えつから、はいつ向うさ行つて教えらつしやい」
て、こういう風に言うた。

「ほんではお願いします」

て言うたれば、鳥はたちまち行つて、勘定した。ほして勘定してきて、みなし

て勘定して来て教えた。

「杉の木、表の山に七万本。松の木、右の山に五万本。栗の木、左の山に三万本、計十五万本あった」

こういう風に教えだんだど。ほしてほの鳥に勘定してもらったな持つて、旦那の家さ行つて、

「表の山に杉の木七万本、右の山に松の木五万本。左の山に栗三万本、計十五万本」て言うたら、

「よし、すばらしいもんだ。んでは早速おらえの家の簀になつてけらつしやい」
なて、すばらしく仕合せになつた。んだげんども鳥のおかげだていうわけで、
ほこの家では、晦の十五日ていうど、必ず牡丹餅搗いて屋根の上さあげて、ほの
鳥さ御馳走したもんだけど。んだから今でも晦の十五日さあ、鳥ぼたもちていう
たもんだけど。どんぴんからりん、すつからりん。

むかしむかし、ある村に百姓家あつて、ほこのおかちゃんが継母なんだけど。ところが来る日も来る日も雨降らね、ほして堤に何だか水たつぷりあつても、さつぱり水流つて来ね。ほのおかちゃんが、おつつあんに、「水かけておけな」て、いつでも言つて、おつつあんが別などこさ用達しに行く。行つてみても水さつぱり来ねがら、掛けらんね。干つたまんまでは何とも仕様ないもんだから、ほのまま子さ、先腹の子さ、

「お前、水かけて来い、ほんねど飯食せねぞ」だの、「家さ置かねぞ」なのて言つだ。んで、まま子なもんだから、仕方なくて水かけ行つたれば、一滴の水も流つていね。

「ああ、おかちゃんが、こだんどこで、おれさ水かけろなて、困つたもんだなあ」と思つていた。ほうしたら、モグラが蛇に吞まれつどこでいだつけ。いまつうとで吞まれつどこでいた。はいつ蛇ば放してやつて、ほしてモグラば助けて呉だ。

したればモグラ何べんも礼しながら、頭さげながら、土の中さ入って行つた。

ほして、ほこさ心配顔して、久しくいだれば、こんど別な大きなモグラきて、
「家の子ども助けてもらつて、どうもありがとうございます。何かあな心配
そうな顔してござつけども、何か心配ごとでもあるんだか」

て聞いたらば、

「いや、実は、おかちゃんに田さ水かけて来ねど、家、追出^{ほだ}すの、ほら、御飯食
せねのつて言^やつた」

「ほだな簡単だ。おらだの仲間、みなして今、堤さ孔あけて、水出してあげつか
ら、かけらつしやい」て。

「ほだごとしたら、あの蛇にやつつけらんねか、ここの蛇に」

「いや、ここにはすばらしく大きい蛇いだけんども、おらだは数はいっぱいいた。
何とかなんべ」

ていうわけで、ほしてモグラだ、一生懸命モグラ一族だ、ほこ掘つて、水、ど
うと流して呉^けだ。千刈田さ水、たちまち満々になつてかかつてしまった。

ところが蛇は困ったこと始まった。一つ二つの孔だら、ふさぎようもあつけんども、何百匹の、何千匹というモグラに孔あけらつたもんだから、蓋しようも何もない。とうとう水のないどころに、沼のないところに蛇はいらんねくて、どこかさ行つてしまつたはあ。ほして、まま子はほこさ、ゆうゆうと水かけて、家さ行つた。ところが家では水なのかけて来ねど思つて、

「千刈田さ水かけて来たか」

「はい、かけてきました」

「嘘ばり」

行つてみれば、並々かがつた。あだな一滴もないどつから、あだえ大きい沼から、こだえかけるにや、神かがりだべというわけで、まま母も、いたく後悔して、「いや、おれ悪れがつた」というわけで、ほしてあやまつて、家内中仲よく暮した。またモグラだも蛇いねぐなつてはあ、またゆうゆうとほこで暮すいようになつたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

92 石炭の由来

401

むかしむかし、ある村で山火事あった。ぼんぼん、ぼんぼん燃える。大きい山火事になつてはあ、ほして二日も燃えてやつと消しとめだ。ところが真中ごろ、一か所だけは何^{なえ}つたて消えね。どんどん、どんどん燃えてる。ほしてみんなして村中して、片っ端からつうとずつ土かけ、土かけ、消して行つた。ほしたれば、ある人、

「あららら、みな石燃えているんだ」

て言うた。黒い石みな燃える。ほしてやつと鎮火させで、ほして話題になつた。

「黒い石、燃えるざあ不思議だ」

んで、あそこさ、いまいっぺん行つてみんなて、ほして行つてみた。ほしてほつから黒い石とつてきて、家さ来て、焚いでみたれば、やつぱり燃える。ほれから《燃える石》ていうので、ほつからみんな取つてきて燃やすがつた。それが石炭のはじまりだけど。どんぴんからりん、すつからりん。

むかしむかし、ある村で田植した。ほして毎年、米、ええあんばい穫つていだんだんども、何だか、水なのかけねげんど、黒い水あずうつと田さかかつて、田は地金減つて行く。植えたときよりだんだんえ悪くなつて行く。なんぼ肥料こやししてもわかんね。昔だから、ほれ、粉糠ふつたり、何かえしても、田はなおんね。分結もしね。だんだえ、こう、おかしなこともあるもんだ。

「米穫んねど、こりや困つたこと始まる」と思つていた。ほして、

「いや、仕方ない、一服つけんべ」

て、百姓はほこで尻けつついで一服して、火打ち石でカチャリン、カチャリンと火打鳴らして、熊のホクチさつけて、煙草喫むべと思つたら、その火もれて、ほして田の水燃えはじまつた。えんえんともえた。

「はあ、こりや燃える水だ」

て、ほっから皆もえる水汲んできて、ほして、菜種油つかつた灯芯ランプ燭台

なていうものさ使ったれば、大変便利だった。はいつが今の石油の油田だったど。
どんぴんからりん、すっからりん。

94 銅 の 山

403

むかしむかし、焚き物とつてくるもええげんども、焚き物とるには、どの山さ
入ってなんねえどか、どこそこ開かねどて、昔は大変めんどうだった。ほんでほ
の燃える石探しがはやって、どこそこにもあつけ、ここそこにもあつけていうわ
けで、石炭探した。はいつ、唐鍬や何かいで、掘って来たばりでええがったが
ら、燃える石探した。

ところがあるどこさ行ったらば、ゾッキリ、ゾッキリとワラジ切れる。

「おかしいこともあるもんだ」

と思つて見たれば、ピカピカ光っていだつて。て、はいつがこんどへ切れる

石でいうなで、結局、山火事するとき、銅の鉾山あつどこ、銅が自然に山火事で出てきたど。はいつは土器、石器よりも皮剥いだり、切つたりに便利だつたど。ほれから鉾山ていうな始まつたんだど。どんぴんからりん、すつからりん。

95 寝太郎 — ぬるくす太郎 —

404

むかしむかし、ある村に太郎と名付いつた、とつてもぬるくすな若衆いだつた。んだげんど頭だけはすば抜けてええがつた。

ほして、ある時、考えだ。ぬるくすで稼がねもんだから錢もない。正月、餅食だいげんど、餅米買う錢もない。一策を案じた。自分の家の虎猫さ紅ガラ塗つて、ほして長者どんの家さ忍ばせてやつた。猫も腹減つてゐるもんだから、どこここなく経巡つて歩つて、餅の上歩つたり何かえして、皆餅赤くしたり、齧つたりした。ほうしたけあ、長者、次の日、はいつ見っただけあ、

「あらら、餅赤くなった。これは凶だ。うまくないこともある。こだなもの捨ててしまえはあ」

て、裏さみな捨てだ。はいつ太郎が行って、ゆっくり頂戴してきて、たらふく御馳走なつた。ほしてこんど、間もなく、ワナでキジせめてきて、ほしてキジの背中さちようちん結^ゆつた。ほしてほのちようちんさは、〈天照皇大神宮〉と書いた。次の晩、長者の家の杉の木の天辺さのぼって、

「これこれ、長者、長者」

て呼ばつた。前に悪れことあつたもんだから、何かまた悪れごとあつかと思つて、

「はいはい」

「おれは天照皇大神宮だ、よく見ろ」

「はあ、ほうがつす」

ていうわけで手合せながら、頭上げてみたら、天照皇大神宮で書かつてだちようちんが下がつた。ほうしたけあ、

「このちようちんの向う方向に、太郎という若衆がいる。その者を簪にとらねど、お前の身上しんしょうほろびんぞ」

て言うた。ほして間もなく、ほのキジば、放してやった。キジざあ右さぐらり左さぐらりなて向かんね、向いた方さ真直ぐ行く癖があつて、ほっちこつちさ曲むずらんね。ほんで向けらつた方さ、真直ぐとんで行つた。はいつは丁度太郎の家の方だつた。

「はいはい、わかりました。ほんでは太郎殿、家の簪にします」

ていうわけで、次の日、人頼んで太郎どこさ簪もらいに來た。ほして結局、「よしよし、うまく行つた」ていうわけで、ほこさ太郎が簪になつて、ほれからこんど、あんまりぬるくすすねぐなつて、一生懸命稼ぐようになったけど。んだから頭のええ人にはかなわねもんだつて、昔あ言うたけど。どんぴんからりん、すつからりん。

96 十二支由来

405

むかしむかし、天竺のお釈迦さまが、腹痛くして、腹痛くてバダバダ苦しんだ。ほしてどこかにええ薬ないかて、みんな手分けして探した。ところが、ねずみがええ薬もって帰ってきた。ほしていまつうとで（少し）、お釈迦さまさ、はいつ捧げっと思つたれば、猫にとらつてしまった。

んで、はいつごしやえだお釈迦さま、

「人は苦しんでいっどき、せつかく行つて薬採ってきたな、薬ごとお前、ねずみは殺して食つてしまふ。もつての他だ。お前はこれから永久に人間のお守り役させられねはあ」

ていうわけで、十二支から猫あ除がっだんだど。んだから、ネ、ウシ、トラ：ていう十二支さ、今でも猫の名前入っていねなだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、ある百姓が用達しに行つて帰つて来んべと思つたれば、餓鬼べら、鱒せめて、バダバダ、バダバダ、大きい鱒、可哀そうだなあと思つたほの人が、「お前だ、その鱒、おれさ売つて呉^けねが」て言うたど。

「ええつだな、鱒など、せめつどなんぼも居るも、売るつだな。なんぼで買つて呉るよ」

なていうわけで、鱒は買つて、ほの人が大きい川さ、

「ええか、こんどから、あんまり端の方さ来んなよ、取られっからよ」

なていうわけで、やさしく鱒ばいたわつて放してやったんだど。ほだえして二、

三日おもつたれば、きれいな女尋ねてきて、ほして、

「どうか、おれば置いてけらっしゃい」

て言う。んだげんど、

「こだな貧乏家で、置いでけろなて言^やつたつて」

て言うたれば、

「おれ、働つから、なぜかかぜか置いてばりけらしやい」

ほして、ほこさ住みついた。まず稼ぐこと。炊事、洗濯、針仕事、ハタキかけ
パタパタ掃除、まずこたえらんね。ほして炊事のお汁つゆの味のええことしたら、魂
消んなね。ほだな味のええな食ったことない。んだげんど、ほの女は言うがった
て。

「決して、おれ台所で料理してつどこだけは見ねでけらしやいなあ」

て言うたて。見ねでけろて言やつだな、どうしても見っだいな人情で、ほして夕
方、ちように炊事やる頃、ほの男は炊事場、こそつとのぞて見た。ほうしたれば
ほの自分が、女だとばかり思っていたな、はいつが雑魚の鰯なんだけど。ほして、
自分の体から卵しぼって、ほして卵で味ええぐすんなだけど。はいつ見らつだも
んだから、

「あらら、みにくいどこ見らつでしまった。んでは、おさらばつだなはあ」
て言うたけあ、

「実は、あなたに助けてもらった、あの鱒だった、一生恩返しすったくてお前ど
こさ来たげんど、みにくい姿見らっでから、ほだえいつまでもいらんねっだな
はあ」

て、ほっからすうつと姿消して居ねぐなっただけはあ。んだから、見ねで呉ろ
て言っだどこ、見るもんでないて言うたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

98 山 鳥 女 房

407

むかしむかし、ある若者が用達し行つて帰つて来っと思つたれば、バダバダ、
バダバダで音する。何だと思つたれば、ほのキジがワナさかかつて、ししやます
(手を余して) しつたけど。

「はあ、可哀そうだ、ほに」

ていうわけで、ほのキジばワナからはずして呉^けで、ほして、はさまっだどこ、

ほれ撫でて呉たぐらいにして、飛ばしてやった。それから二、三日おもったれば、やっぱりきれいな女の人が、

「どうか一晩だけ泊めてけらっしやい」

て来たつて。ほして夕方も、

「おれ遅いもんだから、他さ行つて泊らっしやい」

ても言^やんねくて、ほんではというわけで、根がやさしい人なもんだから、泊めた。ところが、

「おれ、機織つから、機織りの機師こしやえでけらっしやい」

て言うたつて。ほして機師こしやえでけだれば、次の日から機織り始めた。ほんどき、

「おれ、機織つたどこだけ、決して見ねでけろな」

て、ほして三日ばりおもつたらば、

「織り上がったがらつて」て、機師からはずして持ってきた。いや、はいつの布地のきれいなこと、見たこともない。はいつ町さ持つて行つて売つたれば、すば

らしい高く売った。ほしたけあ、欲出てきて、ほの若者は、

「いま一反織ってもらわねべか」

て言うたつて。

「はい」

て、まず引受けて、またトンカラリン、トンカラリンで織り始めた。んだげんど、あだえ、ええな、なぜして織んだべと思つてそつと梁の上さあがつて見たれば、自分の羽根ば一本一本とつて、キジが織つていだんだけど。ほうしたけあ、ほのキジは、

「いや、みにくいどこ見らつてしまった。実は四、五日前、あなたに助けてもらったキジだった。恩返ししたくて、お宅さお上りしたんだげんど、こういうみにくい体見らつてから、長居するわけに行かねつたな、おさらばでございますはあ」
ていうわけで、キジは飛ぶもさんねくてはあ、タタタタて走つて居ねぐなつてしまつたど。んだから、見ん^やなて言つたどこは、決して見るもんでないどて言うたもんだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、七福神さまでいうないだ。ところがみんな同じ仕事してつかと思うど、顔、形、体つき違うと同じように、みな分担つあるんだけど。

お大黒さま。これは働きもので、一生懸命働いて、米でも麦でも何でもとるよ
うに教える指導員だけど。

恵比須さま、これは食糧係、穀類ばり食ったってわかんね。雑魚もとって食
なねて、鯛なの持っているんだけど。

福祿寿さま。これは稼ぐばり稼いだって分らね。いろいろ帳面つけて、今の出
納係。銭出したり入れたり、こいつ、ちゃんとみな記帳しておく。

寿老人。これは年とっても元気だていうなで、保健衛生係。

毘沙門さま。巡査みたいなもんで、七福神ば守る神さまだけど。

布袋さま。廃品回収係で、ワラジなど、まだ履くいなで、捨てたりすつど、袋
さ、ぽっと入つて、装着るいななど、ほこらさあつど、ぽいっと入つて、無沙汰

にしねようにて回収して、大事に物は使うようにて教えて歩った人だったど。

弁財天さま。みんなきれいだなあて見つけんども、きれいだばりでなくて、七福神みんな仲よくするように、和合の神さまだけど。

どんぴんからりん、すっからりん。

100 六部と牡丹餅

409

むかしむかし、六部さまていうな居て、六部さま、ほっちゃ泊ったり、こつちや泊ったりすんなだけど。

んで、家の息子なの、あんまり早く夜上りして、囲炉裏さなの当っていつど、
「おつ、早稲^{わせ}六部泊っていだんだな、こりや」

なて、先^{せん}には言うていだんだだけど。

ほの六部さま、ある家さ泊んべど思つて、ほこの若いおかちゃんが、娘の小便

ただすしたり、あるいはオシメ、次の子どもんな取換えて呉^けだ。ほんで手も洗わねで牡丹餅搗きはだた（始めた）。牡丹餅搗いだけあ、こんど、はいつ千切つて分け方始まった。

「ほいつ食せられんのじゃ、とてもじゃない」

というわけで、次の隣の家さ行つた。そして泊つた。したれば隣の家では、

「なんだって、おら家の家さ泊らっしゃい」

て、上げて呉^けだ。ほして、夕飯御馳走なんべと思つたれば、

「都合あつて、牡丹餅搗かねでしまつて」

というわけで、ほして牡丹餅持つてきて御馳走なつた。

「ほの牡丹餅、どっから用意してきたもんだ」

というたれば、

「隣から持つて来たんだ」て。

「ああ、やつぱり、当る罰はどこさ行つても当るて言うたもんだ。こりや。ほんでは結局隣さ泊つても、こっちゃ泊つても、おれ食^かんなねんだつたな」

ていうたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

101 桑 原 桑 原

410

むかしむかし、あるどこで、春先のうらかな日、ほっち眺め、こっち眺めしつた雷さま、あんまり気分ええもんだから、はっと思つたとき、足滑^{すべ}らかして、落つてきた。ほしてある家の井戸さ落つてしまった。上がんべと思つたげんど、ほれ、太鼓は背負つてゐる。風出す風の袋は背負つてゐる。雨降らせるジヨロは背負つてゐる。ほら、臍^{へろ}抜いだなの、舌^{べろ}抜いだなの背負つてゐるもんだから、なえつたて上がんね。ししやますしつたどこさ、ほこの旦那がきて、

「なんだ、ほこさ落つたな、雷さまでないか」

「ほだ、何とか助けてけらしやいます」

ほして、ほんではというわけで、上がんべと思つたげんど、なかなか上げらん

ね、隣近所みな寄せて、ほして一族郎党呼ばってきて、ほして太鼓上げて呉^けたり、風の袋上げてけだりして、やつとあげた。ほしたら雷さま、

「いやいや、御世話になった、あなた一族郎党の苗字は何ていうんだ」

て聞いた。「おらだ一族は、〈桑原〉て言うんだ」

「ああ、ほうがつす。忘れねがら、若しおれがほっちこつちでやかましくなった時、〈桑原、桑原〉て言うてさえもうじど、ほこさ来ねがら」

ていうて、天さのぼって行つた。んだから、雷さま鳴つど、桑原桑原て言うて、カヤの中さ入ったり、線香立てたりして、〈桑原桑原〉て言うど、雷さま遠^とくさ行くて言うたもんだけど。どんびんからりん、すつからりん。

むかしむかし、あるところに飛脚商売の人いだっけど。ほの人は目的のところまで行ってくるには、ワラジ三足も背負んなねけど。

「こだえ、ワラジ背負わんなねこんでは、何かええ工夫ないべか、ワラジ代ばかり、馬鹿になんね」

昔は、ほれ、二足で三文なて言うたげんども、三文の金も大変だった。で、ほの飛脚の人、考えた。

「ほりや、トクサだらば減らねべ」

というわけで、トクサでワラジ作った。ほしてはいっ履いて、ある時、書簡もつて走って行った。だんだえ足、軽こぐなる、はか行かねげんど軽くなる。峠の天辺まで行つたときには、胸のあたりまで減ったんだどはあ。ほしてほつから、どんどん、どんどん降^おつて行つて目的地さ着いて、「こんにちは」て言うとき、頭しかなかったどはあ。んだがらて、トクサのワラジなて、ほだな、体の方減るもの

作ったてわかんねて、昔の人は言うたもんだど。どんぴんからりん、すっからりん。

103 鴨取りの大当たり

むかしむかし、あるどこに法印さまいだったど。ほの法印さま、狩人好きで、鉄砲打ち好きでなんねがったど。

ある時、ずうつと行ったらば、鴨十二匹ばり泥突っついっただけど。

「よし、あいつ打ってけらんね」

なて。先には、散弾せんなてなくて、一つ弾だった。ほして、ほの鉄砲の台尻ふるわせて、つうと動かして一発やらかした。次々鴨打ち抜いで行つて、みなさ当た。ところが二羽だけは川の真中にいたもんだから、川さ流った。

「ありやりや、川さ流つて行ぐど、いたましい」

ていうわけで、いきなり川さ飛び込んで、ほの二羽もつかまえて、ほの十二羽、次々に陸の方さ上げてよこして、ほうしてひとかためにしつつた。ほして、へどっこいしょと上がんべと思つて、木の棒杭つかんだ。ところがほの、木の棒杭だと思つたな、兎の伴足つかんでしまった。

兎は後足おさえらつだもんだから、前足で一生懸命掘つた。ほして、やつこらさとあがつたれば、ほこさ山芋十貫目ばかり掘らつたつた。

「いやいや、山芋十貫目、鴨十二匹、兎一羽とつた」

て、喜んで大いきで家さ帰つてきた。ほして家さ来てみだれば何だか股引の中コチャコチャする。おかしいなあと思つて股引脱いでみたらば、股引の中さ、どじょう三升ばり入つただけど。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、ある時、和尚さま法事さ招ばつて帰り道、餓鬼べら一生懸命、川さ小便たつてだ。

「こらこら、お前だ川さ小便たつたりするもんでない。下流にいた人、うんと迷惑すんぞ」

したら、いきなり向き変えて、こんどは畠の方さたつた。

「こらこら、畑さもたれるもんでない。畑には畑の神さま、川には川の神さま、山には山の神さまというないんだ」

「ほんでは、和尚さま、どさたれつどええんだ」
て言うた。

「神のないどこさ、たれらんなね」

て言うたけあ、いきなり一人の我鬼あすると木の上さのぼって行つたけあ、和尚の頭さ小便ひっかけた。

「こらこら、何だ、おれの頭さ小便ひっかけて」

て言うたれば、

「和尚さんの頭に髪一本もないから、髪一本もないどこさたれろていうから、我慢さんねぐなったから、いきなりたっだ」

て言うたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

105 恵比須講

414

むかしむかし、十一月二十日ていうど、二十日恵比須講ていうのあった。ほの恵比須講ていうのは、股大根あげて、お恵比須さま、元、餅で招ばつて、あんまり食いすぎした。ところが隣村では大根勘定して、決して、大根食せんて言うて、いじめらつたことある。ほんどき若い女が機転きかせて、股大根の股の方、恵比須さまさ上げて、恵比須さま、腹痛くしねで事なきを得たていうわけで、股

大根あげんのだけど。ほんで、

「今晚、恵比須講だな」

て言うたれば、おっつあんが、

「いや、今晚は恵比須講だ」

て言うた。ほうしたれば、かか、

「恵比須講ざああんまいちやえ、ドベス講つだな」

ほうしたれば、嫁さま、

「おら方ではエベス講だのドベス講だのて言^やねで、キベス講て言うでばよ」

ほら、エビス講、本当だの、ドベス講、本当だの、キベス講、本当だのて、喧嘩はじまった。ほして、

「ほんじゃ、お寺さまさ行つて聞いてみんなねつだな」

ていうわけで、お寺さま、中さ入つて、

「お寺さま、お寺さま、絵さ書いだなだから、エベス講、本当だべな」

「結構」

ほれからこんど、かか、

「土でこしやえたもんだも、ドベス講だべなあ、お寺さま」て言うたらば、

「それも結構」

嫁は、

「んで、おら方では、木でこしやえだもんだから、キベス講て言うたもんだず」

「それも結構」

て言うたつて。「絵き描いたものはエベス講というてもええし、木でこしやえだものはキベス講でもええし、土でこしやえだものはドベス講でもええ、家内中丸くなつて暮すごんだれば、ほれにこれに越したことはない」

て、お寺さまに教えらっただけど。ほれからその家では丸くなつて、みんな思いのことしねで、ほして話合つてするようになって、大変栄えだけど。どんぴんからりん、すつからりん。

むかしむかし、あるとき、泥棒がどこさ入ったらええがんべと思って、ほっちこっちさ行つたげんども、どこの家もサンかかつて入らんね。ほしてずうつと村はずれの方さ行つたれば一軒だけサンかかつていない家あつた。よしというわけでそこさ入つて行つた。入つて行つて、まず、へもの盗人^{せん}には、家の人ば動かんねぐして〜というわけで、まず親父とかかの、先にはみなチョンマゲ結つたもんだから、男衆も女衆も髪長かつた。ほしてはいつば、元結いできちつと結つてけだ。

こんどは女中。女中寝つだどこさ、カイモチ、女中の尻の方さ、ほこさいつばい置いて呉だ。ほうしたけあ、ガタンゴトン、ガタンゴトンて言うので、

「ありや、盗人だ」ていうので、起きんべと思つたら、

「痛たたた、誰だ、かか、人の髪ひつばつて」

「髪引張つたなて、おれも引張らつてた、なんだ、ほんでは結わ^ゆつていたなつたな。ほんでは、女中ば起こせ」て言うわけで、

「こりゃこりや、姉^{あね}、早く起きろ、まず、泥棒入った」

「んだて、おら、むぐつてはあ、起きらんねもんだっすはあ」

て言うたつたて。んだから、女中として、カイモチいっぱい入れらつたな、うしろの方さ入れらつた。うんだから夜のうちむぐしたもんだと思って、早合点した。んだから、決して戸締りしねで寝るもんでないて、昔の人言うたもんだど。どんぴんからりん、すっからりん。

107 中折帽の由来

むかしむかし、あるところに葬式あつて、ほこさ村長さんが洋服着て、山高帽かぶつて行つた。ところが葬式すんで、三十五日。

「三十五日まで、暫時の間、休憩してけらっしゃい」

て言^やつて、ほの山高帽の中さマンジュウ入つて、家の隅こさ置ிட்ட。ところ

が、ねずみ出はつてきて、ほの山高帽さ孔あけて、饅頭食つてしまった。ほうすど、孔あいっだ帽子かぶつて歩かんねもんだから、村長さんが、ほこ真中へこませて縫ってもらつた。ほしてほいつかぶつて行つたら、馬鹿に格好ええがつた。ほれから、山高帽が中折になつたけど。どんぴんからりん、すつからりん。

108 沢庵漬の由来

417

むかしむかし、沢庵和尚というえらい和尚が流罪になつて、上山藩お預けになつた。ところが徳のある和尚さんなもんだから、百姓あるいは町人からいろいろもらい物あつた。ほして秋さかなの、大根、菜っぱなの、ししやますするほどもらうがつた。んだげんど、物を無沙汰にさんねて、常日頃教えているもんだから、はいっ一杯もらつたな、捨てるに捨てらんねもんだから、軒場さ下げて、ほして乾かして、がさ少くして大根漬けだ。ほうして漬けて、ほこさ百姓など行つて、

お茶御馳走なつて、ほの、干して漬けた大根、御馳走になつたれば、むやみうまいがった。

「和尚さま、和尚さま、こだえうまい大根漬け、あなたのお名前頂戴して、沢庵漬で名付けたら、なんとべ」

ていうわけで、ほれから大根干したの漬けたの〈沢庵漬〉ていうようになったど。どんぴんからりん、すつからりん。

109 田の草取り

418

むかしむかし、あるところに大きい百姓あつて、ほこに一枚で千刈田ていうなあつけど。ところが、ほれ、田の草取り、みんな嫌やんだもんだから、若衆だ、ぐるつとまわしてはあ、

「取つてきたすはあ」て言うて、毎年田の真中頃悪れぐてはあ、荒れんなだつた

ど。一策を案じて旦那、田のちょうど真中ごろさ、台置いて、はいつの上さ、赤いお膳さニシン、ほれから生味噌、一斗樽さ酒二本、こいつ立てておくのだけど。ほして、「取つてきた」「今日は何にもなかったか」「何にもないがった」

「はあ、ほうか、ほんではお前だ、田の草取らね」

こういう風にごしやがれつかったど。

ほしてある時、真面目なばり取つて、ちょうど真中ごろまで行ったらば、やっぱり、その賄いものあつて。ほして、

「ほんじゃ、こいつ御馳走なつてもええていうわけだべ」

ていうので、田で御馳走なつたれば、みな酔つてはあ、どんちゃん騒ぎになつた。ニシンに生味噌つけて食つて、酒、お椀で御馳走になつていた。ほして、

「旦那、旦那、今日、何だてええ御馳走あつてはあ、一日取らねで、半日で、まづはあ、御馳走なつて、みんなこだごとなつてしまったはあ」

て言うた。したれば、

「ああ、ほんでええなだ。はいつはおら家の祝いことだから、ほこまで行ったら

いつでも飲んで食って、ゆっくりしてける」

て、旦那は言うたった。んだから誤魔化したりすねで、真面目にすんなねもんだて言うたもんだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

110 団子の木の汁

419

むかしむかし、秋田の佐竹侯が夏まけでとつてもひどい目あった。ほして医者さかかつて、「何薬ええがんべ」て言うたれば、首かしげっただけあ、

「これはオベベの汁でないと駄目つゆだなあ」

て言うけ。ほして、城中では、若い美女みな集めて、ほして、オベベの汁とらんなねべなあていうわけで、十五才から三十才までのうら若い女みな集めて、ほしてその汁取った。ほして一斗樽さ、はいつ集めて、毒味役がはいつ呑んでみんべと思つたら、いや、こりやとてもじゃなくて、くさくてくさくて、呑まんね。

「こだなもの、殿さまさ吞ませたら、かえって病氣悪くなんべ」

と、こういうわけで、医者に、いまいっぺん聞いてみた。

「竹庵どの、竹庵どの、オベベの汁、これだけ集めたげんども、何だか吞めそうもない」

見ただけあ、医者、

「かいつは何の汁もってきたんだ。おれ言うたオベベの汁て言うのは、団子の木の傷ついたどっからにじみ出る、あの赤い汁のことだ。この辺ではアカメなていうていっけんども、あいつ、煮て食べる人もいる。そいつが一番夏まけに効くのだ」

て言っで、ほして取り直したけど。どんぴんからりん、すっからりん。

むかし、櫓下の庄屋から生居村の庄屋さ使い行つた。ところが櫓下ぎあ、宿場で、大変、当時寺子屋なてあつて、勉強してるから、こりや、粗相あつてなんないと思つて、生居の庄屋が櫓下の、使い行つたのば、招じ入れた。

「まことに御苦労さまでございました。炉辺に近着きんちやく召され、炉辺に近着きんちやく召され」
と言うた。ところが、櫓下でもそんなに頭のええ、学問した人ばりいたわけなくて、はいつは無学文盲だつた。〈炉辺に近着きんちやく召され〉て言やつだな、何だかわからね。櫓下から使い行つてわからねがつたなていうのも癪だから、

「えへん、ちやちやもちやく、えへん、ちやちやもちやく」

と言うた。ところが向うの庄屋どの、〈ちやちやもちやく〉わからね。

「いやいや、あの櫓下さま、まず、わたしの言うたな、〈寒いから、囲炉裏端さ近寄つてあだつてけらしやい〉ていうこと言うたんだげんど、あなたの〈えへん、ちやちやもちやく〉ていうな、どういう意味だべつす」

て聞いた。

「いや、これはな、歩いて来たから温かくて当んたてもええて、言うたんだった」
て言うたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

112 桃栗三年柿八年

421

むかしむかし、廃藩置県になって、いよいよもって、明治の御治世になった。御一新になった。ほして昔の役人が「羅卒」て言うて、いまの巡査みたいになつた。ほんで羅卒が田舎さ廻ってきた。ところが昔からいろいろな風紀上の問題があつたもんだから、ほだごど知しやねで、若い娘がいきなり、腰巻ふたぐつて小便たつた。はいっほの見つた、草刈りして鎌砥ぎしたんだげんども、いきなり鎌砥ぎやめて、自分のかき始めた。ほうしたらば、羅卒、ほこさ来たけあ、

「お前、公衆の面前で、尻ふたぐつて小便たつたりしてなんね。もも食うたから、

桃栗三年だ」

ほうして、はいつ見っただほの若衆は砥石ぶんなげて、自分のかいっだもんだから、「かき（柿）八年」て、桃栗三年、柿八年て言っただけど。どんぴんからりん、すっからりん。

113 梅

干

422

むかしむかし、あるお寺で、春先のながいのどかな日に、とつてもポカポカで
気持ええがったもんだから、ほこに、お寺さんつあ、昔はおくさんて持たんねがっ
た。んだもんだから、女中さんが一人いだった。ほの女中さんも年頃なもんだっ
たから、身もてあまして、長い長芋つつこんでもてあそんでいた。

ところが、和尚さんは和尚さんで、また尺八吹いっただげんども、どうも尺八の
孔、気になつて仕様ないもんだから、つうと小^ちつちやがったげんども、無理無理

自分の入っで見た。ところがおえねえこと始まった。尺八から、何ったて^{なえ}抜けねぐなってしまった。女中さんが女中さんで、ほの山芋、何ったて^{なえ}抜けねぐなつた。不思議なこともあるもんだと思つて、こりや困つたこと始まったもんだと思つて、二人は別々に考へつだつた。

ほうしたら、ほれ、春先なもんだから、猫あ、さかり来て、ほっちやドタン、こっちやボタンでいて、ほして、梅干のコガひつくりかえしてしまつた。ガチャンたれば、ハツと思つて、いきなり力入つたれば、女中さんは山芋抜けたし、和尚さん、ほの尺八から抜けただけど。梅干のコガひつくり返したので、梅ていうな、やつぱり、ひつくりかえつても（難除け）なもんだなて言うたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、ある村に亀蔵ていう、とつてもトツキな人いだつけど。んだからソコツなもんだから、みな「トツキ亀、トツキ亀」ていうがった。

ほしてほのトツキ亀は底抜けに人がええ。町ちやなの買物頼まつで行つて、

「ええが、正月の買物、おつつあん、椎茸買つてきてけるな」

なて言うど、どつから買つてきたんだか、〈フェダゲ〉なの買つてくる。ほしてまた、

「ザツパ買つてきてけるな」

なて言うど、餓鬼べらのラツパなど買つてくる。ほだなええ方で、買物に行つて何も買わねでもどつてくることなのばりあつたど。

んだげんど、せつせと働くもんだから、銭貯まる。銭貯つど一文銭は紐ひほさ通して、五十文、百文で、ほしてほの銭の面つら見て、にこにこ、にこにこていんなだけど。ちようどほの頃、ほの村に古峯講ていう講があつた。火災、盗難除け、ほれ

から福の神授かるというわけで、講さみんなは進んで混わったもんだ。いわゆる貯^{ため}、無尽。

ほして、こつからは遠^とかい、岩代の方の古峯神社さ、みんなお詣りに行く。ほしてはいつが廻り番コで当る。トツキ亀さんがその年古峯講さ当った。弘法さまさお詣りするんだからて言うて、すっかり喜んで、村の代表だ。村の代表だからにや、こりや身成りもきちんとして、新しいものづくめで、上着、下着とも新しくして行かんね。

して、その亀藏はふと考えた。

「おれは常に貧乏もの、貧乏もので言^やつでいっけんども一生に一度、こりや講に当ったんだから、絹の褌してみっだい、村の庄屋さまだつて白木綿しかしたことない。おらだなの三尺の古なしかしたことない、絹の褌はお殿さまばりだ。この際、思い切つて絹の褌でもして、村の人から、ほこらの人ば、一泡吹かせてやんなね」

ていうわけで、町の呉服屋から小巾三尺の白の本絹の布地買つてきて、早速奥

さんに紐つけてもらつて越中禪用意した。ほして弁当は弁当箱さ入れるようにして、まず暗いうち出発した。ほして弁当背負つて、荷物ば振り分けにして、うしろ前さかついで、銭は百文銭ば一文ずつ紐さ通して、ほして財布さ入つて、たつたつたと行つた。ほしてあるどこまで行つたら夜明けた。んだげんど、このまんま行つたんでは、絹の褌しつたつて誰もわかんねからていうわけで、尻まくつて絹の褌出して行つた。

ほうして、ある城下町まで行つた。鼻唄機嫌で歩いて行つたれば、通るすがりの人は、股グラんどこ見て、みなにこにこ、にこにこて笑つて行く。口なおさえて笑つて行く。

「おかしいこともあるもんだ、ははあ、様見あがれ、おれが絹の褌してつから、身分に相応すねど思つて笑つて行くんだな」

と思つて行つた。ほだえしてるうち、先つぽえの方、つうとかゆいような気がする。ほして城下町んどこまで行つて、小便たれんべと思つて魂消た。ほしたれば先の方さ、ブド赤くなるほど、ちようど昔、蚕のお種紙というのあつた。ほいつ

のお種紙みたいになっただけはあ。みなブド食って。ほして絹の褌しった勘定したな、家さ忘せで来て、絹の褌しねで、野放しでいったんだけど。

「いや、いや、これはもうた」

と思ったげんど、それは後のまつりだった。

「ははあ、何だ、野郎べら笑ったな、おれのそれ見て笑ったんだな、こりや。あんまり風通しええと思った。こりや失敗した。んだげんど仕方ない、気にしていらんねから」

て、また、たったたつたつと行った。

ほしていいいよ、古峯さまさお詣りした。お詣りすつどき、まず百文から十文はずして、十文上げてお詣りすつど思った。ところが、手滑らせて、十文の方こつちや置いて、百文の方、思い切つて投げてしまった。

「ありやりや」

と思ったときには、トツキなもんだから、まずはあ何とも仕様なかったど。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、あるところに王さまいだつたど。

ほしてある時、家来全部連て、狩に行つた。その間、妃さま留守しつたんだげんど、ふいに帰つて来てみたれば、その奥さま、黒人と不義結んでいた。それをごつしやえだ王様が、たちまち妃さまば殺してしまつてはあ、ほして女ていうな信じらんねぐなたはあ。次々と夜伽ぎにつかせて殺す。一晚夜伽につかせては殺した。ほして殺して、だんだえ殺して行つたもんだから、女も少なくなつて最後にこんどは宰相の娘。

ところがその妹娘ていうな、とっても利発だつた。ほしてほこさ行つた。ほして一晚夜伽について物語りが続いて、ほして決して読み切りていうな、ない。こつから先、ほんて面白くなつた時、「明日の晩ではあ」て言う。ほの続き聞きたいもんだから、王様、殺さねでしまつたはあ。

またその次の晩も、物語り始める。いわゆる今だつたらへむかし、とんとん

みたいなもんだったど。ほして、読み切りもの語らねで、本当にいまつうとで面白くなるというときに、「パタツ」と切って、「明日の晩」。またほれ、はいつ聞きたいもんだから、はいつ殺さねでまた次の晩に延ばした。それがえんえんと千一夜に及んだ。三年間もそういう語り口したつて。ほしているうちに、宰相の娘は、「王様、そうしているうちは、あなたは社会的にも人道的にも、ええぐないごんだ」

という風に、自分、自作の昔話をずうっと語って行つて改心させた。したれば千一夜に及んだ頃、

「いやいや、おれは今まで悪れごととしていたんだなあ」
ていうな悟つて、ほして殺すな止めて、

「お前、おれと一緒になつてけろ」

ほしてとうとう、ほの宰相の娘が王様と一緒になつたけど。んだから、頭のええ人にはかなわねもんだつて、昔から言つたもんだけど。どんびんからりん、すつからりん。

むかしむかし、このへうすびきワラジうすびきていうななくて、ずっと前は「素ワラジ」て言うて、棲しゴかかつていねワラジだった。ところが山さ行ぐど、蝮蛇に喰つたがったり、あるいは木さ引掛けて爪はがしたり、石さぶつつけたり、重たいもの背負つて歩つたりなんかいすつど、大変不都合だった。

農耕さ牛使うようになってきた。牛ば引張つたり使つたりすんなねようになつてきた。ところが牛は元氣ええくて、はね廻つたり何かえすつど、よく、この、足で踏んづけられて怪我したもんだ。何とかええ工夫ないかていうわけで、

「ほんでは、ワラジさ棲しゴつけたらどうだべ」

ていうことを考えて、棲しゴつけた。ところが棲しゴつけてから怪我が半分もなくなった。んだからこの辺では、牛率くとき履くワラジだからへうすびきワラジうすびきて言うた。どんびんなからりん、すっからりん。

ほれから「山刀切り」。

ある人、山さ弁当持^たつて木伐りに行つた。ところが天気ええつもりして行つたれば、一天にわかにかきくもり、ものすごい雨になった。ほうすつど、頭さ何もかぶつていね。普通、田畑だれば笠かぶつて行ぐ。山さ笠ていうど、木が邪魔になつて、何とも仕様ない。んだもんだから、その日は天気ええと思つて笠持たねで行つたもんでもあるし、急に雨降らつた。

ほの人あ考えた。ママハケゴ（御飯を入れるハケゴ）ば真中からぶつとり切つて、ほして、御飯^まばハケゴの方さぎりつと押し込んでその半分をかぶつてみたれば、とつても具合ええがった。ほしてはいつかぶつて仕事した。ところがはいつ見っだけあ、

「君、ええものの編んでだもんだな。何ていうもんだ」

ほの人は、ハケゴば切つたなて言わねで、「いや、これは、山刀切りていうもんだ」。山刀で真中からぶつとり切つてかぶつた。ちようど、ハケゴば半分にしたよな奴、この辺では、（山刀伐り）は（ニゾ）て言う。なしていうど、山刀でぶつとり切つてかぶつた人が仁蔵て名付つた人だつたて。んだから、今でも（ニゾ）

て言うてだ。戦前までは山仕事や山中くぐって雨降りん時、茸とりしたり、草刈りなんかえすつぎには、とにかく（ニゾ）でなくてはなんねがった。どんぴんからりん、すつからりん。

117 胆 だ め し

426

むかしむかし、若衆だ夏分など退屈してよくいろいろな、もよおしものやった。ほんで手輕にできんのは、五六人集まっと試胆会というのやった。若衆の集まるどっから三、四百米離ったどこに、お不動さまあった。そのお不動さまさ行つて、早くの人は剣もつて来る。後の人は、それをお不動さまさ収めてくる。そののくりかえし、途中には馬鹿にし役というか、おどし役というな隠つていで、出没しておどかした。胆の細かい者はふるえたり、泣いたり、いろいろそれが面白くて試胆会というの、よくやったもんだ。

ところが、ある時、人逝くなつて新しく葬つて、ほのお墓さ、花環だ何だていうの造り花など新たなうち、

「お墓さ行つて杭打つてくることにしたらええべ」

「いつあええがんべ」

というわけで、ほして最初の人は杭打つてくる。次の人はその杭持つてくる。また次の人は行つて打つてくる。その繰返しした。一人の人になつたれば、なんぼしても、常に大きいことばり言うているんだけど、なんぼしても返つて来ね。

「おかしいこともあるもんだ」

と思つて、みんなして行つて見たれば、お墓さ倒つていだっけはあ。ほして気絶した。ゆり動かしたり、水かけたりしてやつと蘇生させて、

「おいおい、君、なにした、まず」

て言うたらば、

「ああ、ぶつ魂消た、杭打つて来つと思つたれば、お墓からいきなり手出して、おれな着物押えだ、なんぼ逃げんべと思つても、逃げらんねくて、ほこで気絶し

て、ほれから何だかわかんねはあ」

「ほだごどないべなあ」

て言うたらば、ほの杭打つとき、あんまり泡食つて打ったもんだから、自分の着物の裾さ杭打ってしまった。んだから、立つて、おっかなびつくり来んべと思つたれば、ほれ、丁度杭さ引掛かったもんだから、引張つだみだいになった。はいつで幽霊に引張らつたでないかて、はつと思つて、ほこで氣絶してしまった。んだから度胸もないくせ、あんまり大きいこと言んねもんだつて、先の人^{せん}は言うたもんだど。どんびんからりん、すつからりん。

118

苞^{つと}コの納豆の賭

427

むかしむかし、賭けごとというな、よくしたもんだけど。

半刻で、納豆、苞コまんま食えつか食^かんねかていうので、賭になったつて。

「ほだな、ワラだも。食^かれるもんでない」「いや食^くい」「いや食^かんね」

ほしてとうとうドブロク一升賭けになった。ほうしたけあ、食^くえて言う人、な
ぜすっかと思つたれば、ほの、「用意、どん」で半刻。ほうしたれば大きい鍋さ苞
コがらみ入つて、カラリカラリて、煎り始めた。だんだえほの苞コは黒くなつて、
ほして炭みたいになつてしまつたはあ。炭から、こんど火点いて、灰になつてし
まつた。「まだ四十分だ」て言うて、ほれからこんど、納豆は苞コから取り出して
おいっただほで、ほの苞コの灰になつたのさ、納豆ばくるくと混ぜで、ほしては
いつ食つてしまつた。ほんで、ほれ、煮てわれ、焼いて悪れていう約束すねがつ
たもんだから、納豆苞コがらみ食^かつて、賭けた人負けだつけど。どんびんからり
ん、すっからりん。

むかしむかし、二十五貫目の砂糖樽一時間で舐めるという人いだった。

「とんでもない、ほだな舐められるもんでない」

ほいつも論判の末、賭けになった。

「んだらば、おれの言う通りにして呉つか」

「いや、なぜでもする。ほだな舐めっこんだらば…」

て言うた。「よし」て言うわけで、カナテコとドンコイ、ドンコイと、黒砂糖一本掘って、ほして「ほいつば五寸直径の団子にまるべてける」て。ほしてほいつば二十五ばりに丸めた。

「出来たか」「出来た。ほんでは時間もあっけんど、今から舐めんぞ」

て言うけあ、くるりくるりと舐めて、ちよえつと置き、ちよえつちよえつと舐めて置きして、つるつと舐めてしまった。したけあ、

「おれは食うて言うたんでない、舐めるて言うたんだ」

て言うて、はいつも賭けに負けただけ。どんびんからりん、すっからりん。

120 かちかち山

429

むかしむかし、じんつあとばんちやいだけずま。

じんつあ、毎日、春先なもんだから、シクジリの山畑さ行つて、豆蒔きしつた
んだけど。

一粒蒔いたら 千なれ

二粒蒔いたら 二千なれ

て蒔いっだ。ところが山から狸出はつてきて、

一粒蒔いたら くっされろ

二粒蒔いたら くっされろ

て言うた。じんつあ、ごしやえで、「この畜生」て言うても、狸、早くて中々つ

かまらね。次の日もまた、「一粒蒔いたら、千になれ。二粒蒔いたら、二千になれ」て言うたら、狸出はってきて、「一粒蒔いたら、くっされろ。二粒蒔いても、くっされろ」て言うたど。じんつあ、「うまいことないべかなあ」て考えつだ。

「はあ、あの畜生、杉の木の切り株ぶづいさ、したえで（腰おろして）、おれさ悪態あくたいついた。明日、あいつさ鳥餅もっちぬってけらんね」

て言うわけで、次の日はいつさ、鳥餅ぬって、早く行ってはあ、ほして知しやねふりしてまた、「二粒蒔いたら、千になれ。二粒蒔いたら、二千になれ」て言うど、狸あまた面白いがって、山からゴソゴソ降つてきて、ほの切り株さ。たつと尻けつついたが最後、今度取んねぐなつた。

「こん畜生！」て、じんつあ言うたげんど、逃げらんね。とうとうじんつあにおさえらつてしまった。手と足と結ゆわつてしまつてはあ、じんつあにかつがれて来た。ほして家さ来て、

「ばんちや、ばんちや、狸捕せめめてきた」

「はあ、ええがつたこどあ、ほんでは今夜狸汁だなあ」

「ほだほだ」、ほして「ほんでは、おれは粉はたいて」ていうわけで、ばんちや、粉はたき始まった。トンカラ、トンカラて。じんつあ、

「ほんでは、ちよつと用達してくつから」て出はつて行つた。ほしたけあ、

「ばんちや、ばんちや、粉はたき大変だべはあ」て、狸言うたつて。

「うん、年取つたから大変だ」

「おれ、はたいて手伝つて呉る」

「ほうか」て言うわけで、ばんちや、手足ゆるめて呉^けで、解いだけだ。ほうしたれば杵持^{たが}つて、トンカエ、トンカエ、トンカエと狸はたいた。

「ばんちや、ばんちや、搗けたか搗けねか、まず、見てみて呉^けろ、まず」

ほうして、ばんちや曲つたどこ、ばんちやの頭、ゴギラア、スコンと叩いて、ばんちやば殺してしまつてはあ、ばんちやば料理して狸汁のつもりにしてはあ、ばんちやば煮てしまつたんだどはあ、狸が。

何も知しやねで、じんつあ用達しから帰つて来たれば、

「じんつあ、じんつあ、粉はたいだしはあ、狸汁出来つたはあ」

て、狸はばんちやに化けではあ言うてだんだとはあ。じんつあ、ほだごど知しやねで、「どれ」て食つてみだれば、しなこくてしなこくてなんね。

「ばんちや、ばんちや、今日の狸汁は、むやみにしなこいな」

しなこいも道理

流しの下 見あがれ

て言うた。見てみたれば、ばんちや殺さつていだっけど。

「あら、あの狸の畜生だほに」

なんとも仕様ないて、じんつあ、アンアンて泣いっただど。くやしくなつてはあ。ほしたれば、ピヨコンピヨコンと山から兎がきて、

「じんつあ、じんつあ、なして泣いっただ」

「こうこう、こういうわけで、ばんちや殺さつて狸に煮らつてしまったはあ」

「よし、おえねえ野郎だ、んだらば、おれ、狸の仇とつて呉る」

こういうわけで、狸んどこさ兎遊びに行つた。

「おお、狸くん、狸くん、今日はむやみ天気ええから、杉葉拾い行がねが」

「ええがんばなあ」ていうわけで、二人は杉葉拾い、山さ行つた。ほしてええ頃加減拾つて、二人背負つた。

「お前早く行げ」

「いやいや、おれは足早いだから、遅くでも、どつからでも追つかつたから、あなた前立て」

ていうわけで、狸は前立てて、うしろから火打石と火打ち金で火付けた。カチツ、カチツとしたれば、

「おう、なんだか、不気味な音するな、カチツカチツていうな、何だやい」
て聞いた。

「いや、ここは先^{せん}にからカチカチ山て音する山だも」

「はあ、カチカチ山か」

ほだえしているうち、ぽおっと燃え始まつた。

「何だか、ぽうぽうて言うね」

「ここは、ボウボウ山だ」

ほだえしているうち、熱くなった。

「あちち…」

やけどだ

背中、大した火傷してしまった。ほうすつどこんどは、「いたい、いたい」て言うわけで、寝っだどこさ、次の日、薬屋に化けて、ほして火傷の膏薬売りに行った。

「火傷の膏薬いらねが、火傷の膏薬いらねが」て行った。

「ああ、火傷の膏薬呉ろ」

ところが、南蛮ミソすって行った。「どこ火傷した」て言うたれば、

「いや、背中だ」

「ほんでは、つけて上げっか」

「つけてもらうと、ありがたい」

て言うわけで、南蛮味噌、火傷したどこさ、りゆつと塗ったれば、「いたたた

…」て、何とも仕様なかった。

「ほんでは、川さ行って、水でも塗らんなねべ、舟遊びでもすんべ」

て言うわけで、ほして、川さ連^せて行つた。ほして兎ののつた舟は木の舟で、狸さのせた舟は土舟だった。途中まで行つたけあ、だんだえ、だんだえ土舟が水吸つてきたけあ、ブクブク、ブクブクで沈み始めた。

「あららら…、何だか沈むようだ」

なてるうち、カイ棒ではあ、狸ばぐつぐつと押しつけてはあ、ほして兎あ殺してしまつたはあ。川さ沈めてしまつた。ほしてゆうゆうと仇とつて、

「じんつあ、じんつあ、こういうわけで仇とつてきた」

「ああ、ええがつた、ええがつた」

て言うたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、天氣のええ日、蟹が遊んでいたら、ヤキメシ落つでだけど。

「ええもの落つでだこりや、持つて行つてみんなして分けて食^かんなねなあ」

と思つていた。ほしてずうつとはいつ持つて来たら、猿こ、はいつ見てで、

「あら、ヤキメシ持^{たが}つたりや、あいつ、なぜかして食つてみたいもんだなあ、とつてみっだもんだな。なぜかええ工面ないべか」

て、ほこら探したれば、柿の種一つ落つでだけ。はいつ持^{たが}つて行つて、

「おいおい、蟹くん、蟹くん、ほのヤキメシと柿の種、取換えねが」

て言うたど。

「いやあ、ほだな柿の種となの、嫌^{やん}だい」

「なして嫌^やんだなて、ほだな、あの、手入れして、今七、八年もおもうど、すばらしく柿^な実るぜ、んだど、ヤキメシ^なの一食^{ひとく}いだげんど、毎年柿^{とし}食えつだな」

「はいつも、んだな。んだらええがんべ、取換えんべ」

て言うわけで、ほこで取換えだ。で、猿あヤキメシ、ぱくぱく食いながら、山中さ入って行ってしまった。蟹は、こんどはええものの交換したというわけで、家さ持って行つて、家の庭さ植えて、ほして手入れした。水かけて、

早く芽を出せ 柿の種

出さねどハサミでハサミ切る

て。したれば、芽むっくりむっくり出して来たつて。

早く木になれ 柿の種

ならぬとハサミでハサミ切る

て言うたれば、こんどむっくりむっくり大きくなって木になった。ほしてその通り、早く花咲け、早く実がなれで、とうとう実なってしまったはあ。ところがこんど山から猿降つできて、ほして柿泥棒はじめだ。蟹は、ほに、木さ登らんねから、熟して落ちんなばり待つてだ。ところが上さ登って行つて、猿あみな片っ端から食つてしまう。

「いや、お猿さん、ほんではなんねべな、人の柿だまって泥棒してなんねべな」

猿あごしやえで、渋柿、蟹さぶつつけてしまった。いや蟹は柿ぶつつけらったもんだから、甲羅さ当って、べっちよりつぶでしまつて大怪我した。死ぬか生きつかわかんねはあて。ほして小蟹だ、「あんあん、あん」て泣ிட்ட。

ほこさ、山からぶうーんと蜂がとんできて、「なして泣ிட்ட」「こういうわけ……」て、一部始終語つたら、

「うん、悪^われ野郎だ、おれあ仇^{かたき}とつてけつから、ええ、泣くな」

ほだえしているうち、ころころ、ころころて来たもんだから、何だと思つたれば、ほいつも山から栗が転んできたけ。ほして栗もはいつ聞いて、ごしやえだ。

「よし、ほだらば、おれも手伝う」

ゴロン、ゴロンと音すつど思つたれば、何だと思つたれば臼が来たけど。臼も聞いてごしやえだ。

「よーし、おれも仇とつて呉る」

ほして、臼が屋根の上さあがった。蜂がちょうど流しの水瓶のかげさ隠つた。栗は囲炉裏の中さ入って行つた。ところが柿、たらふく食つて、

「ああ、腹いっぱいになったし、あんまり柿食ったれば、つうと寒くなったから、火でもほじぐって当んべ」

て言うわけで、猿が家の中さ入ってきて、火ほじぐつと思つたれば、栗がはじけた。「バチーン」「あちち…、水かけんなね」て、流しさ走つて行つたれば、流しの水瓶のかげから長い槍で蜂あジュクツと刺した。

「いたたた…、こだな家にいらんない、熱いし、いたいし、何とも仕様ない」

ていうわけで、裏から出はつて行くと思つたれば、裏の口で、牛のビタ糞さ上がつて、ズルリ滑つて転んだ。転んだどこさ屋根の上から、ごろんごろんと臼落つてきて、ぺっちよりと猿ば押さえつけてしまつて、ほして皆して仇とらつただけど。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、正直なじんつあとばんちやいだっけど。ほうしてある時、畑さ稼ぎに行くべと思つたれば、白い犬コは捨てらつて、ひんひん、ひんひんて尻尾を股さはさんで泣いっただけど。

「おお、かわいそうだ。どれどれ、家さ行くべ」

ていうわけで、はいつば連^せてきて、あつかった。まず、「ほらほら、まず御飯食え、ほらほら魚食^くえ」て、だんだえ、だんだえ大きくなつて、色もええぐなつて、真つ白くなつて、その、すばらしくええ犬になった。

ほうしたれば、ある時、ほの、じんつあ、ばんちや言うたど。

「おれも、こだえ一生懸命扱わつて大きくしてもらつた。捨て犬だったげんど大きくしてもらつて、あれだから、恩返しに金掘り連^せて行く」

ほして、車さ、

ほら、カマスもつけろ クエンクエンクエン

唐鍬もつけろ クエンクエンクエン

て行つた。ほうして、車さみなつけて、行つたれば、

ここ掘れ ワンワン

ここ掘れ ワンワン

ほこ掘つてみたれば、銭と金あ、ざくざく、ざくざく出た。ほしてはいつ家さ
持つて来たれば、隣のじんつあとばんちや、ほいつ見ただけざあ、

「なぜして、銭と金、お前の家に、ふだ（たくさん）になつた」

正直なもんだから語つたて。

「こうこう、こういうわけで、犬のおかげでよ」て言うたらば、

「ほの犬、おら家さ貸してけろ」

「いや貸さんねつだな」

「いや、貸せ」て言うて、ビリビリもつて行つた。ほしてへこ掘れ、ワンワン
なて言^やねなば、へこらだかへなて言うけあ、掘り始めた。ほしたれば、牛のビタ
糞なの、カワラなの、瀬戸かけなのばりガチャガチャ出てきた。ほしてはあ、頭

さ来て、ほの隣のじんつあ白ば殺してしまった。ほして、白を返しに来ねが行つたれば、殺してしまったはあて。

「あらら、殺してしまったなて、ほんでは仕方ない、なきがらばりも呉てけらっしゃい」

て、ほして白もらつて来て、白ば、ねんごろに葬つて埋めて、ほこさ一本の松の木植えた。ところがたちまち太くなった。ほして、

「ああ、こだえ太くなつたはあ、こりや臼でもこしやえるいべなあ、こりや」

て、切つて臼こしやえで、餅ついてみたれば、ほの餅はむっくりむっくりとふぐつで来て、

「なんだべ、ばんちや、ばんちや、餅ふぐつで来たぜこりや」

なているうち、はいつの中から銭と金あまたざくざくと出てきた。

「あらら…、銭と金…」

はいつ、隙間から隣のじんつあとばんちや見っただけあ、

「ほの臼、おら家さ貸せ」

「いや、こんど貸さね」

「だめだ、貸せ」て、持つて行つたけあ、いきなり餅米ふかして、餅搗き始めたけあ、何と錢と金出るどころか、やつぱりビタ糞などばり、ベツチャラ、ベツチャラなつてしまつてはあ、餅も食んねくなつてしまつたはあ。ごしやえで、いきなり斧でぶち割つてしまつて、ほうしてはあ、カマドさくべて焚いてしまつたはあ。ほして「臼返してけらしやい」て言うたれば、

「あつじえげだもの、ビタ糞なのばり出はつから焚いてしまつた」

「ああ、焚いてしまつたんでは仕方ない、んでは灰ばりも呉てけらしやい」
て言うて、灰持つてきた。ほうしたれば風で、ほの灰あピラピラと飛んで、か
かつたどこさ、みな咲く、桜であらうか、梅であらうか、

「ありやりや、不思議なこともあるもんだ」

ちようど、そのころ、殿さまがお通りになつた。ほこさ行つて、

「花咲かじじい、花を咲かせてお目にかけます。花咲かじじい、花を咲かせてお
目にかけます」

て、大声でどなつて、灰ばらばらまいたれば、ほころこらみな花だらけになつた。桜の花、梅の花、桃の花。ほうしたれば殿さま、馬の上から、「あつぱれであるぞ」。ほしてお褒めになつて、どつさり御褒美もらつた。

「前途に花咲かせてくれるなて、とても縁起がええ、お前さ褒美をとらす」
というわけで、御褒美いっぱいもらった。

はいつ見つた、「よし、あの灰なら、おらえにまだあんぞ」というわけで、灰ですら持つて、ほの殿さまお帰りになつとき、

「花咲かじじい、花を咲かせてお目にかけます」

風上さ行つて、ほの灰、おつぷら廻したれば、殿さまから家来から、みな目さ入ってしまった。

「無礼者、とりおさえろ」

ていうわけで、隣の悪れじんつあ、とりおさえらつただけど。んだから悪れごときあするもんでないて、昔の人あ言うたもんだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、じんつあとばんちやいだけずまあ。じんつあ山さ柴刈りに行つて、ばんちや川さ洗濯に行つたけど。ほうしたれば、川上から何だか赤いきれいなものが、ドンブリコ、ドンブリコで流つてくる。おかしいなあて傍さ行つてみたら、はいつあすばらしい大きい桃だけど。

「あら、桃だ」ていうわけで、いきなり拾い上げて、ほの桃ば家さ持^たつてきて、ほしてじんつあと二人して食うべと思つていだ。ほだえしているうち、じんつあ、山から柴背負つて帰つてきた。

「じんつあ、じんつあ、桃拾つてきた」

「どれどれ、ほんでは割つて、二人して御馳走なんべな」

て、包丁持^たつて割んべと思つたら、割るより早く桃ばかつと割つて、中から玉のような男の子が産声と共に生まつてきた。

「あら、子どもいねくて、子ども欲しい、子ども欲しいと思つていければ、ほ

に、天のお授けだ」

というわけで、桃から生まったから、〈桃太郎〉でつけんべというわけで、こんどはいつ育てた。ほの桃太郎、ぐんぐん、ぐんぐんおがって、ほして気持はとってもやさしくて、ものすごい力持ちだった。

ところがある日、

「じんつあ、ばんちや、おれはこっから先に鬼が島というところがある。ほの鬼退治に行んからキミダンゴこしやえでけらっしゃい」

て言うたって。

「ああ、お安いご用だ。大丈夫だか」

「いや、キミダンゴさえ食うど、大丈夫だ」

というわけで、ほしてキミダンゴこしやえでもらって腰さぶらさげて、ほして手甲、脚絆に身をかためて、鬼が島さ向った。ほしたら山からキジがケンケンて飛んできた。

「桃太郎さん、桃太郎さん、お腰のものは何ですか」て聞いた。

り廻したげんど何ともなんねくて、みな降参した。

「いや、こんどから決して人間さ悪れごとしねがら、かんべんしてけらっしやい」
「そうか、んだら今までお前だ、ほっちいじめたり、こっちいじめたりして取った宝物あるはずだ、ほいつ、みなよこせ」

ほの宝物、車さつんで後押ししたり、前率いたりして、エンヤラヤ、エンヤラヤて来た。じんつあとばんちや心配しつたはあ。

「桃太郎は鬼に殺さつたでないべかなあ」

なて心配しつた。ところがエンヤラヤ、エンヤラヤなて声すつから、シクジリまで出迎え行つたらば、何と宝物山ほど車さつんで帰ってきたけ。めでたし、めでたし。

むかしむかし、じんつあとばんちやいだっけど。ほしてそのじんつあがとつても雀かわいがつていた。ほして、「ほらほら、おまま食え、ほらほら粟だ、稗だ」て食せ^かつだ。ところがある天氣のええ日、ばんちや、着物さ糊つけんべと思つて、糊練つておいだ。ところがほの糊みな舐めてしまった。ほしたれば、ばんちやごしやえで、ほの雀の舌切^{べろ}つてしまったんだとはあ。ほうして雀は痛つだくではあ、チュルンチュルン、チュルンて泣いではあ、どこどもなく行つてしまった。

ほして、じんつあ、稼ぎに行つて来て、雀いねがら、

「ばんちや、ばんちや、雀どさ行つたこりや」て聞いてみたれば、

「あの畜生め、糊なめあがつたから、おれあ、舌切つて飛ばしてやったはあ」

「ああ、かわいそうなことした、おれ行つて見んなね」

て、ほのじんつあ、次の日、舌切らつた雀ば探しに行った。竹やぶから竹やぶさずうつと、へここらいねべか、あそここらいねべかて、「舌切り雀、お宿はどこ

だ」て、ずうつと行つたれば、いだっけど。ほして雀だ、いっばいいて、ほして子雀、親雀だ居て、ほしてほのじんつあば迎え出て呉^けで、ほして、

「こつちや、ござっさい」ていうわけで、雀の宿さ行つたわけだ。ほうして、

「ほの雀は御厄介になつて、じんつあにめんどうみてもらつた」ていう。さあ、酒よ料理よて、大変いろいろ御馳走になつて、

「ほんでは家さ帰んなねはあ、ばんちや心配すつどなんねから」て家さ帰つどき、

「ほんではお土産あげつから、重たいツヅラええべか、軽いツヅラええべか」て聞いた。

「おれあ、年取つて重たいななて背負わんねから、軽いなでええごではあ」ていうわけで、「ほうか」ていうわけで、軽いツヅラ背負わせてよこした。ほしてドッコイ、ドッコイと家さ来て、はいつ開けてみれば錢と金いっぱい入つたけ。はいつ見つだばんちや、「よし、ほんでは、おれも」て言うわけで、「舌切り雀、お宿はどこだ」て、じんつあに言^やつたとおり行つたれば、やつぱり宿があつて、ほごで御馳走さまになつた。ほして帰り、

「ばんちゃ、ばんちゃ、重たいツヅラええか、軽いツヅラええか」

て聞いだれば、

「おれあ体丈夫だもの、軽くないらねっだな、重だいなっだな」

ぎつしり重たいなツヅラもらって背負ってきた。ほして、家まで来んな待つでいらんねくて、途中で開けてみた。ほうしたればはいつから、蛇、蛙、かなちよろ、なめくじなて、ばんちゃの嫌いなものばり、いっぱい出はって、あげくのはて、蜂まで出はって、ばんちゃ刺さっただけ。んだから、あんまり、鳥いじめたり、欲ふかくしたりさんねもんだていうたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

125 米福と栗福

むかし、ある村に米福と栗福という女の姉妹二人いだっけど。ほして米福が姉ちゃんで栗福が妹。姉ちゃんは今先妻の子どもで、栗福が後おかちゃんの子ども。んで、米福に対しては今のおかちゃんが継母でなるわけだけど。て、ある時、おかちゃんが、つねがね栗福ばりめんごくで、米福めんごくなくて仕様なくて、いじめいじめした。して、今日も今日とて、

「山さ行つて栗拾つてこい」

ほして米福さあずけたハケゴは底なし、栗福さあずけたハケゴは、ええハケゴあずけた。ほして、栗福さ言うには、

「米福の後歩け、後歩いたばりでも拾うい」

はいつなしてだかて言うど、米福は生来真面目で、一生けんめいで拾う、拾うたな皆ハケゴさ入れる。入れつどハケゴから底ないから落ちる。はいつ拾ったばりで、お前たくさんだて教えたわけだ。ほうしてやっぱり米福は一生けんめい拾つ

た。拾ってみても溜らね、溜らねはずだ底抜けてる。その後行つてはあ、栗福はたちまちハケゴさだつぷりになって、家さもどつたはあ。米福は泣き泣き拾つても拾つても、ほれ、落つでしまつてわかんね。

「こいつちや一つなんねうちはあ、家さ来てなんね」

て言^やつだんだし、何とも仕様なくていた。ところが夕方なつたれば幻のように、夢にまで見た自分のおかちゃんが現わつで、

「米福、何も心配すんな、お前さおれついでいっから、大丈夫だ」

て言うて、ほして、着物みたいな呉^けだ。言うには、

「こいつ底にして持つて行げ、今から暗くなつては栗など、ほだえ拾わんねげんども、お前これから拾つた栗ば、家さ行つて、箕さあけたり、蓆さあけたりすつど、たちまちいっぱいなつから、ほしてこの着物はお祭りの時に着て行げよ」

て言うて、打ちかけみたいなきれいな呉^けでよこした。ほしてはいつをたたんでハケゴの底さ入つで、ちらちら暗くなつたどこから、五つ六つ拾つて、はいつちや入つたらば、何だか重たいような氣した。ほして家さ来て、

「おかちゃん、今来たつす」て言うた。

「何だ、いっぱい拾ってきたか」「はい」「箕出してあけてみる」

あけてみたれば、栗福よりずつとええ栗いっぱい拾って来た。

「何だ、他人^{ひと}な盗んできたんであんまいな、盗んできたんでないか」

なて、いっぱい拾ってくつど盗んできた、拾って来ないど拾って来ねていじめられる。んでも賢い米福は、「はい、はい」てばり言うて、何一つ弁解しねがった。ところがいよいよもって秋祭り、祭りになった。秋祭りには、ほんどき着飾って行つた娘ば男衆見でて、「あいつ嫁に欲しい」とか「かいつ嫁に欲しい」どかていう習わしだった。ほして秋祭りさ栗福とおかちゃんが着飾ってはあ、

「ほんではお祭りの屋台見にでも行くべはあ」

ていうわけで、ほんどき米福さ、

「お前ええか、これから米ひいて搗いて、といで、はいつ御飯にして、明日ちゃんと食うように準備して、ほれからでないど来てなんねえぞ、ええか」
ていうわけで、仕事山ほど言いつけて行ってしまったはあ。

「おれなの、お祭りさなの行かんねっだなはあ、米ひいて搗いてなて言うど一晚でなの出つか出ねかわかんねっだなはあ」

て心配した。ところがほこさ友だちがきて、

「米福さん、歩え^あばっしやえ」

つねがね、こころもちええ米福だから友だちいっぱい居た。

「こういうわけで、仕事いっぱいあずけらっで」

「おらだ手伝っだなあ」

て、四、五人も来て、米ひき、米搗き、みな手伝った。たちまち出てしまった。

ほして自分だ、ほれ白粉ついたりして粟福とおかちゃん出はって行っただんど、白粉一つない。んだげんども、幻のように出てきたおかちゃん、「かいっ着て行げ」てよこした、ほのハケゴの底にした着物、ふあつと羽織つてみれば、何とすばらしい目覚めるような美人になった。

「あらら、米福ええ女になった」

て、ほうしてみんなに魂消らった。ほしてお祭りさ行って見たれば、粟福が^め見け

で、

「あら、おかちゃん、米福姉ちゃん来たみたいだ」

て言うたれば、

「何、来つど、あだな来られるわけないっだな、あれほど仕事言いつけて来たんだから、大丈夫だ」

見向きもしねがった。ところが屋台見どころか、出しの踊り見どこでない、ほの米福の器量ええのさ、みな見とれてしまつて、うっとりとしてしまつた。ほこさお祭り見來つた町一番の長者の息子が米福見て一目惚れしてしまつた。

「あいつあ、どこの娘だ」

次の日、いきなり使者立てて、もらいに來た。ところが継母は、ほれ、化粧してええもの着せて行つたべし、米福は行かね勘定だべしすつからて、

「おらえの栗福か」て言うたら、「いや、米福だ」「栗福だべな」「米福だ」ていうて、ほして何とも仕様なくて、「ほんでは米福だな」ていうわけで、

「ははあ、こころ根がやさしいと、きれいに見えるのかなあ」ていうので、ほこ

のおかちゃんが、改心して、米福さええ仕度して嫁入りさせて、ほれから粟福と、ええおかちゃんになって二人で暮したけど。どんぴんからりん、すっからりん。

126 浦島太郎

435

むかしむかし、浦島太郎という人で、その人は雑魚つりして暮していだっけど。ある時浜辺さ行つたれば、子どもら亀の子いじめした。

「かわいそうに、ほだえいじめるもんでない、どうだおれさ売らねが」

というわけで、子どもから亀の子買って、海さ放してやった。亀の子はありがとさま、ありがとさまて言うような、首、何べんも下げてはあ、深いどこさ泳いで行つた。んで、ある時、浦島太郎が釣りに行つたら、その日に限って一匹も釣んね。

「不思議なこともあるもんだなあ、こだえ釣んねこともないになあ」

と思つていたれば、何だかむつくりと波間から浮いてきたものいる、すばらしい大きい亀だっけ。ほしたらばその亀が二三べん首さげっだけあ、

「浦島さま、浦島さま、おれの背中さのつてけらっしやい。おれはあなたに助けらつた亀の子だ。竜宮さ、お連れ申します」

はいつ聞いて、ほれ、浦島太郎見たこともないもんだから、

「ほんでは、お願いします」ていうわけで、亀の甲さのつた。すいすい、すいすい海の底の方さ行つて、竜宮さついたら乙姫さま待つていだっけはあ、ほして、酒よ肴よ、おどりよ歌よて、毎日毎日楽しく暮した。ほして、

「これは春景色だ」

春の部屋に行つてみつど、いや桜の花咲いでる、鶯は鳴く、梅は咲いてる、雛祭りはしている。

「いやあ、これはすばらしい」

「ここは夏景色でございます」

て言うて、ほの夏の部屋見つど、ほこでは山開きあつたり、富士山のような山

さ登山すつどこあったり、こんどは七夕さま、ほら何だて、夏の行事ぎつしりなつた部屋ある。

「ほら冬景色」

というど、こんど冬。餅搗き、お正月いろいろあるわけだ。面白くて面白くて、まず三日ばり暮したはあ。んだげんどもあんまり御厄介になつてでもなんねえし、面白いことばりで変化なくてはあ、少し飽きてきた。んで、「家の方も心配なもんだから、どうか、ぞんぶんに御馳走になつたから、帰らせてけらっしゃい」

て言うたらば、「そうですか」ていうわけで、乙姫さまも、

「おなごりおしうございますけれども」ていうわけで、

「んでは、これ、何もないげんども、あなたさお土産だ。こいつの蓋だけは決して取んねでけらっしゃい。んだどお前は万年の寿命保たれる」

ていうわけで、玉手箱^け呉でよこしたんだど。玉手箱と釣竿たずさえて、また亀の背中さのつて元のどこさ帰ってきた。ほうして帰つて来たれば、何だか様子が

ちがう、ほこらに子どもら遊んでいたけがら聞いてみた。自分の家も何だかないようだ。

「ここらは、何々村でないが」

て言うたれば、「ほだ」て。

「浦島太郎ていうな知しやねが」

て言うたらば、

「ほだな、知しやね、聞いたこともない」

子どもでは、わかんねと思って、

「ここで一番年取った人は何ていう人だ」

て聞いて、ほこの家さ行つて聞いて見た。ところが、八十才ばかりになるじんつあいで、ほして言うには、

「昔、今から三百年前に浦島太郎ていう人が、ここの港から出て行つたきり帰つて来ねがったどはあ」

て、こういう風に言うたて。

「ああ、おれは三日間だと思つて楽しく遊んでいたのが、あれがこの娑婆では三百年であつたか、ああ、ほうか」
て言うわけで、玉手箱を蓋あけてみれば、ほつから白い煙がモヤモヤと立ち上がつて、ほして自分もものすごいヨボヨボのおじいさんになつたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

127 竹の爺

436

むかしむかし、じんつあとばんちやいで、ほのじんつあが竹切つて暮していた。
ほれ、洗濯竿、ほら、竹細工する竹、いろいろ伐つて暮した。

二人のうちに子どもいねがつたもんだから、子ども欲しい、子ども欲しいとい
うわけで、神さまさお祈りしたつた。

ところがある日行つて見たれば、何だか根つこの方がぴかぴか光る竹あつたけ

ど。

「不思議な竹もあるもんだ、竹の光んのざあ、この年なっけんど初めて見た」
というわけで、

「んだら一つ丁寧に切ってみつか」て切ってみたれば、ほの光る竹の中から、ちっちゃこいおぼこ出はってきた。

「はあ」

竹切って暮していつから、ほのじんつあのこと、みんな〈竹取りのおきな〉ていうていつかった。ほしてほの子ども育てたれば、だんだえ、だんだえ器量ええぐなつて、名前ば、〈かぐや姫〉て名付けた。

て、とうとうかぐや姫も年頃になったはあ。ほうしたればその評判聞いたお殿さま、

「ぜひ、お嫁さんに欲しい」

「いや、あの、おら家でも跡取りいねがら呉^けでやらんね」

んだげんども、殿さまの命令で何とも仕方ない。ほして月夜の晩の明るとき、

籠を仕立ててもらいに来たわけだ。その籠、二重にも三重にも警護してお城さつ
れて行くべと思つたら、みんなものすごい睡魔に襲わつた。ねむたくなつて、誰
一人起きつた人いね。ほんどき、ほのかぐや姫、籠から天さすいすい、すいすい
と舞い上がつてしまつた。

ほだえしてゐるうち、目覚めて、あれよあれよと言ううちに、天さ上がつて行つ
てしまつた。どんぴんからりん、すっからりん。

あとがき

佐藤孝一さんに初めてお目にかかったのは、昭和四十年の夏に国学院大学の生徒諸君と、上山市赤山から檜下、皆沢、相生、関根と一部落毎に昔話を探して降りた時のことであつた。夏のじりじり暑い昼に、佐藤さんの蔵座敷で十話ほどの昔話をたてつづけにお聞きした。ひんやりした蔵座敷のことを今でも思い出す。別れしなに佐藤さんは「百話ぐらいは知っているかも知れない」ということを、ぼつりと言われたことが私の頭の中に残つた。

それから私は置賜地方に海老名ちやう、工藤六兵衛、近きよ、その他多くの方々
の昔話をお聞きし、一段落した時に、佐藤さんの話を全部聞こうと考えてお手紙
を差し上げたところ、「遊びに来るつもりで」ということで聞きに出かけたのは、
昭和四十七年の初夏であつた。私の戦時中の小さな体験もよみがえる。中学二年
の昭和十九年に佐藤さんの二、三軒上の鈴木さん宅に勤労働員ということで、田
植時に十日間ぐらい泊まり込みで手伝い―実は邪魔になり―に行つたことがあり、

あるいはその時佐藤さん宅には安彦君という同級生が泊まったのではなかったろうかと思ひ出す。

それはさておき、佐藤さんからの昔話はその後、ぐんぐん数を増し、これで四三六話になった。まさに稀有といふべきだろう。その伝承におけるいろいろな問題に一つの明るい解答の方向を得たことも貴重なことである。しかし、この宿場町の榎下部落という特殊性、元禄時代に殿さまに従つて関西から移つたお伽衆の子孫だという口伝はまだ実証されていないし、まだまだ解明されていない部分も多い。

×

×

今までお聞きした昔話と『日本昔話集成』の対照表を巻末に付したが、これとても完全なものではない。今後も昔話を佐藤さんから加えていただきながら、考究して行きたいと念願しているところであるが、ひとまず孔版を作り、佐藤さんの労をねぎらいたいと思つた次第である。

佐藤家の昔話の集録に当つて、いつも助言、援助をおしまれなかつた関敬吾博

士、臼田甚五郎博士や昔話研究懇談会の稲田浩二、大島建彦、川端豊彦、福田晃先生はじめ先輩同僚の方々、野村純一先生、それに地元の置賜民俗学会の江田忠、奥村幸雄先生、柳田賞受賞の戸川安章先生、県内の先覚者清野久雄先生や大友義助、滝口国也さんなど次々に頭に浮かんでくる。また児童文学の須藤克三先生や松谷みよ子先生、瀬川拓男先生、山形児童文学会の江口、鈴木さん他の方々の支えもありがたく思っている。私事にわたるが私の母がいろいろ手を廻してくれたし、学校の校長先生や先生方、それに家族の援助をうれしく思っているところである。記して感謝申し上げる次第である。

武 田 正

蛤 姫(下)

佐藤家の昔話(八)

昭和五十年四月一日 印刷発行

話者 佐藤孝一

上山市榑下

編者 武田 正

南陽市三間通二三二の三

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

蛤 姫（下） 佐藤家の昔話（八）

＊本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

但し、原本の巻末に付された話型対照表は省略しました。

平成二十三年七月三十日

東北文教大学短期大学部民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

東北文教大学・同短期大学部附属図書館内

（電話）〇二三―六八八―七五四四

- 『西川町の昔話』(一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『むかしあったけど』(一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『米沢市築沢の昔話』(一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『米沢市塩井の昔話』(一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『安楽城の伝承(一)』(一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊)
- 『安楽城の伝承(二)』(一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊)
- 『安楽城の伝承(三)』(一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊)
- 『高畠町和田の昔話』(一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
- 『及位の昔話(一)』(一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
- 『及位の昔話(四)』(一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊)
- 『及位の昔話(五)』(一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊)
- 『佐兵ばなし』(一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊)
- 『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話(一)』(一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊)
- 『かっぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』(一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊)
- 『行けざんざん 小国町昔話集』(一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊)
- 『お婆の手ん箱(一) 阿部キヌオさんの語り』(一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊)
- 『及位の昔話(二)』(一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊)
- 『及位の昔話(三)』(一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊)

- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集―大平・新沼・高畑―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』
(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』(一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『ちようじやのむこ』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(上)』(一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(下)』(一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『木小屋の生活 民話序説』(一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』(一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『川崎みさをさんの昔話』(一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊)

『なら梨とり 赤湯の昔話』(一九六七年一月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(一) 民話のころ(対談) 浜田広介先生と海老名ちやうさん』

(一九七一年四月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(二) 海老名ちやう昔話補遺』

(一九七一年八月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『たかみねと秋田の昔話』(一九七八年二月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『佐藤家の昔話(一) 山形県上山市檜下』(一九七二年七月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鳥吞爺 佐藤家の昔話(二)』(一九七二年九月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鉢かつぎ姫 佐藤家の昔話(三)』(一九七二年十二月発行、二〇一〇年七月再刊)

『天とひばり 佐藤家の昔話(四)』(一九七三年三月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『へらへら話 佐藤家の昔話(五)』(一九七三年七月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『夢のほたる 佐藤家の昔話(六)』(一九七三年十一月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『ぬるくす男 佐藤家の昔話(七)』(一九七四年十月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『蛤姫(上)(下) 佐藤家の昔話(八)』(一九七五年四月発行、二〇一一年七月再刊)

『おとぎり草 佐藤家の昔話(九)』(一九七五年七月発行、二〇一一年七月再刊)

『ゆき女 佐藤家の昔話(十)』(一九七六年二月発行、二〇一一年七月再刊)

